

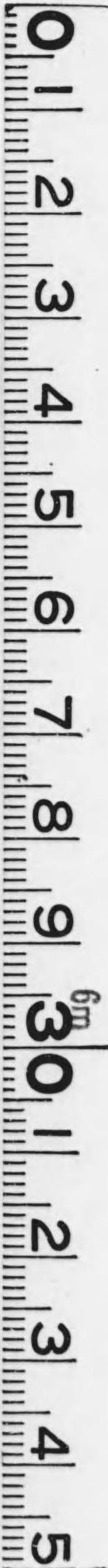
823

367
121

青年修養社編

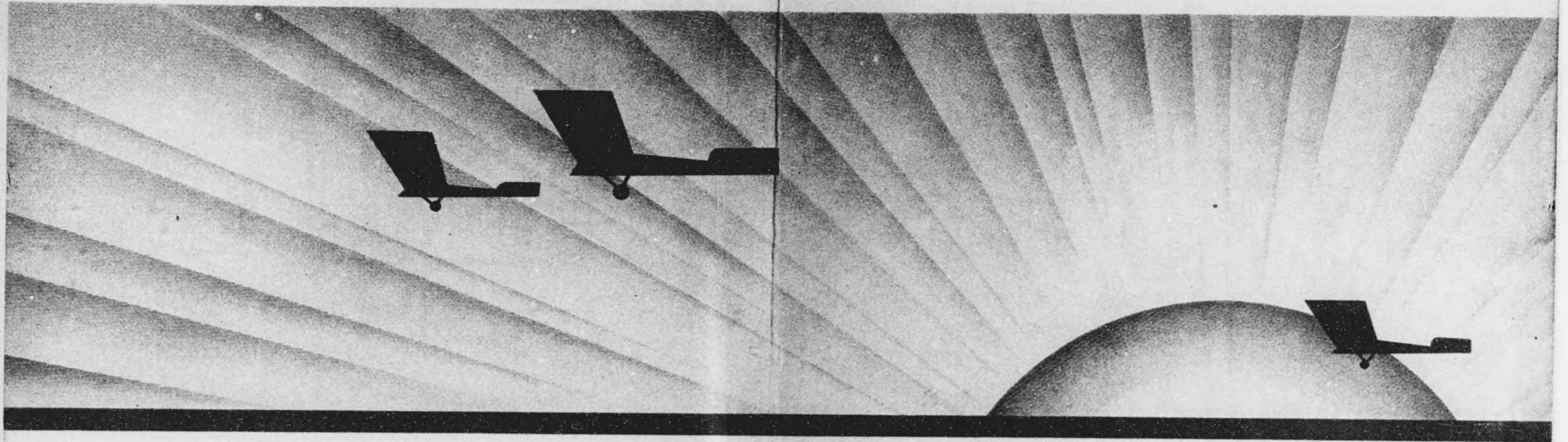
一日一訓を守れ

大阪宏元社書店

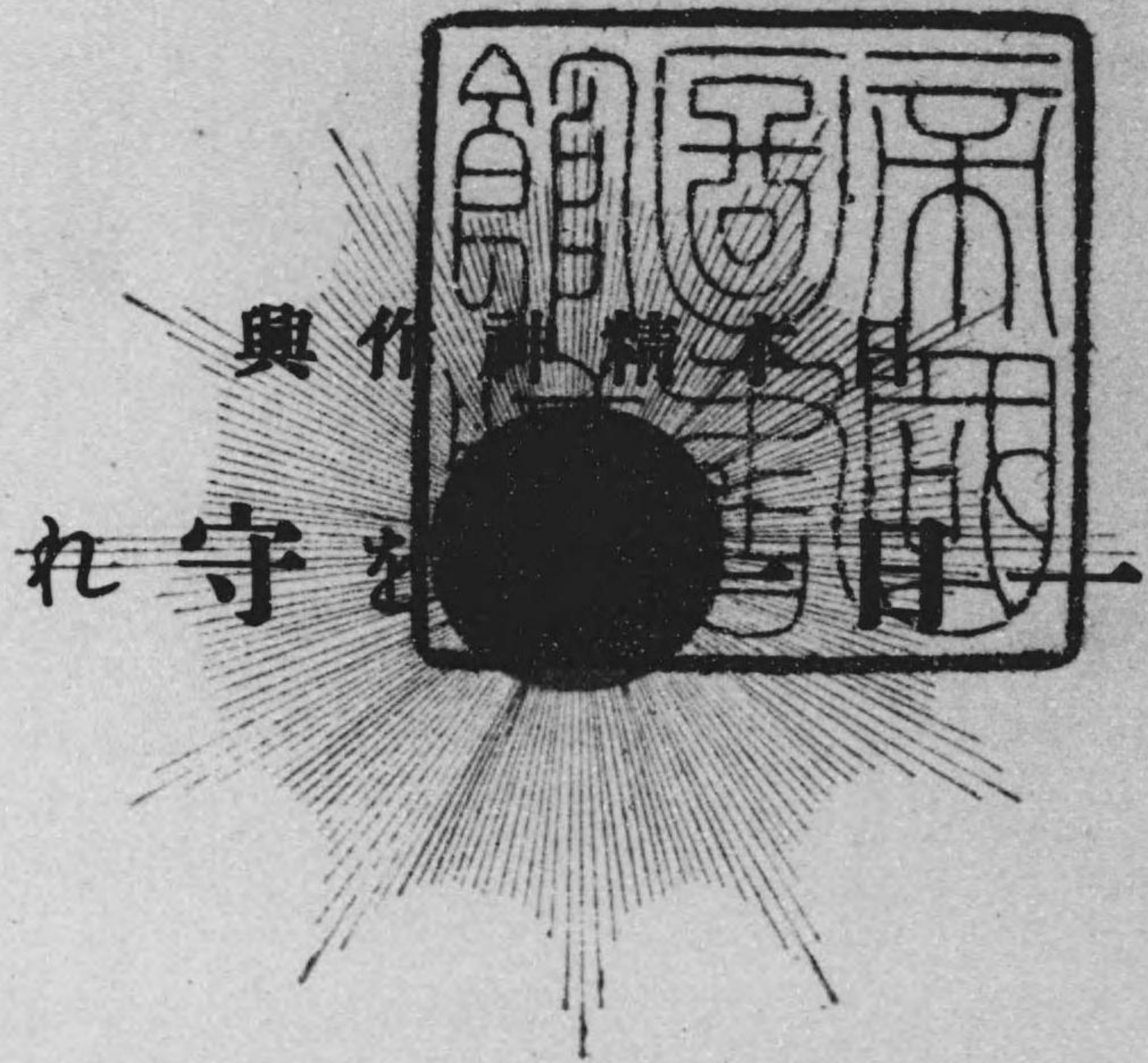


始





特213
561



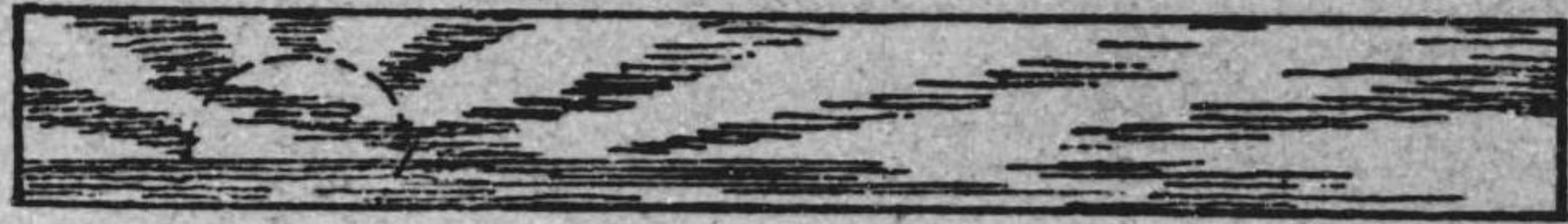
一日一訓を守れ (目次)

修養三百六十五日

自三八四

目次

一



一日一訓を守れ

青年修養社編

一月一日

一善微なりと雖も、日に養ふて害せざれば遂に其の徳を成す、一小悪なりと雖も、日に長じて除かざれば遂に身を失ふ。

(伊藤東涯)

吾人は自己修養につき、旦夕實行して撓まず、以て人格を向上せしめ、國家社會の有用人物たるを期すべきである。蓋し、吾人が自己を修養すると云ふことは、即ち完全なる人格を養成

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

し、以て世の進歩發達を助け、而して人類の抱ける理想の境地に到達せんと努力するに外ならぬのである。之れ、吾人の義務であり、人世の意義である。

要するに、此の世に生を享けたる以上は、萬物中に最も優秀なる、精神身體を有する人類の眞價を發揮せしめ、大に奮闘努力して、其の盡すべきを盡し、其の爲すべきを爲し、自己の地位、身分、職事相當の痕蹟を世に印して行かねばならぬ。斯くしてこそ、社會の一員、國家の一民として、否、人類最大義務を履行し得たものと云ふべきである。

一善微なりと雖も、今後三百六十有五日間養へば徳を成し、智能を啓發すべきであることを囑々して止まぬ。

一月二日

博く愛する之を仁と謂ひ、行ふて之を宜くする之義と謂ひ是に由る之を道と謂ひ、已に足りて外に待つ無き之を徳と謂ふ。

(原 道)

吾人の道徳は此の博愛躬行の精神からでなければならぬ。人に強要された結果とか、或は世間を飾る見榮の爲では不可ない見榮や強要に餘義なくされたものなら、それは偽善である。徳ではない。道徳は自分の爲めに自ら行ふべきである。然して社會は自分を擴大したものなるが故に、自分の徳を修め、徳を行ふことに依つて、改良さ

一日一訓を守れ





一日一頓を守れ

一月三日

金持も矢張飯三杯、無錢矢張飯三杯、醉而暮せ一寸先闇。

餅搗かずと雖も正月は来る。(讀人不知)

現代は三杯の飯さへ錢なくては食ふ能はざる生存競争、世智辛い世の中に、餅を搗かずとも正月は来るけれども、越すに越されぬ人生の大晦日、一寸先は闇にては暮らされざるものにて苦にあつて苦に捉はれぬ、樂にあつても樂に縛されむに、苦樂に超越して人生を下瞰する此のしめく、りあつて笑ふて難事に處する餘裕も出れば、喜んで苦境に突貫する勇氣も出るのである。



二月四日

由女に之を教へん、之を知るを知るとせよ、知らざるを知らずとせよ、之れ知るなり。(論語)

子路の性剛にして、兎角知らぬことをも知つたと云ふ嫌ひがある、斯く教誡されたのである。知らぬと知らぬとするか知つて居るのだとは、意味頗る深長なるもので口を開けて五臟六腑を見せる、蛙の如きもの之を擇らざるなり。

一日一頓を守れ

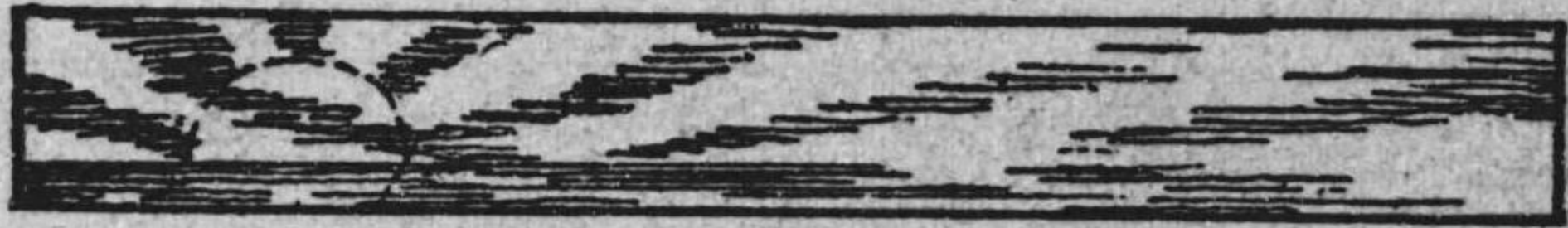


一日一訓を守れ

一月五日

敵國外患なき者は、國恒に亡ぶ。 (孟子)

國家が健全なる發達を遂げて行かうとするには、商工業に於ても、學術技藝に於ても、外交に於ても、常に他國と争つて必ず之に勝つて見せる、と云ふ意氣込みがなければならぬものである。晉に國家のみならず、一個人に於いても、常に四圍に敵があつて之に苦しめられ、その敵と争つて必ず勝つて見せやうと云ふ氣が無ければ、決して發達進歩することは出來ぬのである。



一月六日

小なる事は分別せよ、大なる事に驚くべからず(水戸黃門)
人は得意時代に處しては恰も、彼の小事の前に臨んだ時の如く、天下何事か成らざらんやの概を以て、如何なる事をも頭から呑むで掛るので、動もすれば目算が外れて飛んでもなき失敗に落ちて了ふ。それは小事から大事に醸すと同一義である、されば人は其の得意時代にも調子に乗らずして、大事小事に對して、同一の思慮分別を以て之に臨むべきである。

一日一訓を守れ



一日一詞を守れ

一月七日

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼる。(西行)

神門に佇み、合掌禮拜して、暫時默然たる時、何故とは知るよしもなく、唯々神々しき神威にうたれて、有難涙の自ら迸り出づるを禁じ得ぬのである。これ、我が國特有の國民性である。されば吾人は、永遠に此の國民性を傳へ行かねばならぬ責任の存することを自覺せねばならぬ。



一月八日

角立ちてよいのは燧石ばかり。

(読人不知)

人の心と云ふものは、角立たず、圓滿であつて欲しい。斯くてこそ世の中は、風波絶えて、平和に送られるものである。然し餘りに平に、餘りに圓滿では、所謂、お人好しとなりて、却つて事を仕損することがないではない。地藏の顔も三遍撫でれば腹を立つると云ふ俚諺もあれば、人としても、一角丈はあつて欲しきものにこそ。

一日一詞を守れ



一日一訓を守れ
一月九日

毀譽榮辱の來る、獨り以てその心を動かさざるのみならず
且つ之を資り以て切磋砥礪の地を爲す。故に君子は入ると
して自得せざるなし。若し譽を聞いて喜び、毀を聞いて威
まば、夫れ何を以て君子となさん。(王陽明)
俗物、凡人は、他を賞讚することを知らずして、唯、羨む。
羨むだけならば未だしもであるが、羨みて、我も彼の如く成ら
む、此の如く爲さんと、奮發する所あれば猶よろしいのである
が、凡人俗物の悲しさ、淺ましき、羨む心より一轉して、妬む
もしくは、わが境遇を恨みて、自棄を起すやうになる。是れ多
くは俗物、凡徒の輩で、吾人は其の軌を異にせざるべからず。



一月十日

天知る地知る。

(日本俚諺)

彼の後漢の時代に揚震と云へる者ありて、高官に賄賂を持參
して、誰れも知人としてなければ、お納め下さいと言つた處が、
高官の曰く「天知る、地知る、吾知る、汝知る、此の四知ある
に何ぞ知るものなしと言ふべけんや」とて、之を排けて受けな
かつたと云ふが、實に其の自己を欺かざる心、之ぞ眞に青天白
日である。今の世に我が官邊に在る人々は特に好個の義範と爲
すべきであらう。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

一月十一日

牛馬は皆牛馬と云はるれど

人こそ人といはれかねぬる。(讀人不知)

牛や馬は、各々其の分を守り、牛は常に牛の働を爲し、馬は始終馬の勤をして居る、然るに兎角人は、自己の本分を守り、天職に安じて居る者が少ない、之れ畢竟、自己を知らず、人格を重んぜざるが爲であるまいか、斯くても猶、人間は萬物の靈長なりと誇るに足る點を見出し得るであらうか。要するに吾人は節義心の修養に努め、天職に安んずるの人となるべきである



一月十二日

とんぼつり今日は何處まで行つたやら。

(千代女)

眞に子煩悩の心は直に菩提心である。佛知である。正覺の心である。此の間些の虚欺がない。些の間隙がない。眞實徹底の愛である。

人の子は誰れでも、此の無限の愛に暖められて生育するのである。是を思はば不孝は爲し得むるものである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

一月十三日

我に青春を還せ、我が持つ所の總ての物を與へむ。

(ゲーテ)

中年の人達には、斯うした人生の寂漠を呪ふ叫びが出るものである。けれども、青春には希望に充てる未來が澤山あるのであるが、人生の幸福を築くべき基礎工事を怠つて居たならば、光陰は矢よりも迅く、飛び去つて、前車の轍を履まねばならぬのである。



一月十四日

心の欲する所に従つて矩を踰えず。 (論語)

人は出處進退が大切である。併しながら分に安んずるが良いと云ふもの、進取の氣象を忘れて了つては何にもならぬ、業若し成らずんば死すとも還らすとか、大功は細瑾を顧みずとか、男子一度意を決す、須らく乾坤一擲の快舉を試むべしなど云ふが、其の間にあつても必らず自己の分を忘れてはならぬ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

一月十五日

君子は物を役し、小人は物に役せらる。

(荀子)

苦樂に染着することなく、之に超越してよく大自在を得るのが即ち、物を役する君子の境界。

之れに反して苦樂に執着し、常に外界の見聞覺知に心を悩まされるのが、即ち物に使はる、小小人の境界である。諸士、夫れ何れを歩まむとするか。



一月十六日

十分の努力八分の生活。

(英國俚諺)

剩す所二分では少いと思ふ人もあるが、剩す所が、より以上に在ると働かなくなる。人間は常に後から急ぎ立てられぬと、途中で安逸を貪りたがるものだ、僅に二分では安閑とはして居られぬから働く、働くから収入が殖る、殖るから生活も向上するのである。人生の意義も存するのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

一月十七日

野火焼けども盡きず、春風吹いて又生ず。

(禪林句集)

焼けども盡きぬものは即ち草である。刈るは愚か焼いても又萌え出るのは如何せん、煩惱の草の根は、無始の世から根ざしたものであらう。眞に我が昔し造れる所の諸悪業は皆無始の貪瞋痴に由つて、身、語、意の生じた所のものである。されば吾人は、懺悔の鎌、懺悔の火を以て、刈り盡し、盡き焼さねばならぬのである。



一月十八日

酒は百薬の長。

(日本俚諺)

憂を拂ふ玉筥など、自分勝手な文句を並べて飲むはよいが、積つた酒代に産を破り身を滅ぼすは珍らしからぬ事である。酒代のみならず自己の天壽を全ふせず、且つ子孫の體質をも脆弱ならしむるに於ては、酒代の高價なる驚くべきものである。然るに世人は、刹那の快樂に没了して、永遠の痛苦を招きつゝあるのである。されば吾人は、感覺の世界を脱し、思考批判の境地に入るを勉むべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

一月十九日

君子の交り淡きこと水の若し、小人の交り甘きこと醴の如し。
(莊子)

世間では間の親密ならざることを水臭いと云ふが、臭くては宜しくない。水であらねばならぬ。水は味なきも之を飲んで飽きる人はない。是れ淡くしてよく親む所以である。甘酒は誰が飲んでも甘いものであるが、度を重ねる時は嫌氣の來るものである。之れ即ち甘くして斷絶する所である。されば吾人は前の淡きに親み永遠なるを欲するは勿論である。



一月二十日

天壽を全ふする者は人の本分を盡すものなり。

(福澤諭吉)

ロングフエローは老年に及びて、頭髮は雪の如くなるも、其の顔色は艶々しくて、一見老人の風がない、如何にして斯く何時までも若くて居られるか、との間に答へて曰く、あの老樹を見られよ、まだ花が悪くなつた事を覺えぬのは、あれでも毎年少しづつ、生長して居る故である、我も老年に及んでも、尙幾何づ、でも生成する事を心懸て居る」と、蓋し此くの如きは其の本分を全ふする人と云ふべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

一月二十一日

人にまげ己にかちて我を立てず

義理を立つるが男伊達なり。(読人不知)

「人にまげ」の一語は、右の頬を打たるれば、左の頬を出すか如き意を含んで居る、又その次の「己にかちて」などは勇の洗練されたるものである。勇氣も此所に達すれば、最早匹夫の勇でなく、大勇なるもので、男伊達たるの資格は、第一に勇を揮ふて己に克つにありと思ふ。男伊達ならざる吾々男、亦此の箴を守るべきである。



一月二十二日

成功は急ぐべからず。

(トーマス)

人の大目的を抱て社會に立つや、決して其成功を急ぐことなく、完全に其の目的を達するに勉めねばならぬ。大事業は偶然の出來事に依つて成るものにあらず、又、倉卒の計畫を以ても成るものでもない。之れを成さんと欲するときは、自己の一身に屬する、あらゆる物を犠牲にせねばならぬのであるから、唯獨り歲月のみを惜むことは出來ないのである。大功を得んとせば、夫れ丈け、時日を與へざるべからず。急がば廻る瀬田の唐橋のみではないのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

一月二十三日

吾人瞬時を失はゞ、永久に之れを回復すること能はず。」

(シルレル)

現在に働け、吾人は現在に働かざれば、働くべき時を有たないものである。老人の嘆息する所は常に過去の時を悔ゆ、然れども過去は永久に來らざるものである。青年の怠情なるものは毎に未來を云ふ、然れども未來は現在の一分一秒より成るもので、若し躊躇逡巡、現在の一分一秒に活動せざるに於ては、現在は漸次に、過去の暗黒中に埋没さるゝのである。再び言はん、現在に働けと。



一月二十四日

十人集れば十色

(日本俗諺)

凡そ、世に我が理想の人はあるべくもあらず、利口なる者はすゝとく、正直なる者は氣が利かず、能力あるものは一と癖あり、おとなしき者は、害を爲さぬ代はりに益をも爲さず。之れ皆、一得一失、十人集れば十色である。一々好き嫌ひをすれば終に使ふ人もなく、事を共にする人もないものである。茲に於て、衆を容るゝに雅量に富める人と、君子の徳ある人を、世は欲するのである。

一日一訓を守れ



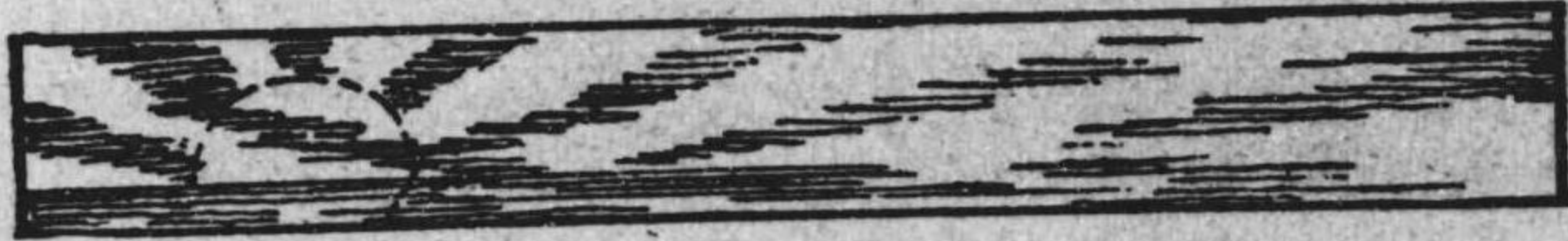
一日一訓を守れ

一月二十五日

汝等諸人は十二時中に使ひ得られ、我は唯十二時中を使ひ得たり。

(趙州和尚)

大概の人は時間に追ひ廻されて居る、忙しくて堪らんと云ふて、心に一寸の餘裕がない。他の意味から言へば仕事をしただけの功がないと云つてもよい。所が修養の出来る人ならば自分で時間を使つて行くものである。今迄は物に使はれて居たが今度は物を使ふと云ふ大なる力になるのである。一口に動くと言ふても、原動的と被動的との違ひがある、夫故に我々は朝から晩まで時に使はれずして、時を使つて行く事を工夫せねばならぬ、是れ修養の一端、成功路の輕捷である。



一月二十六日

猶豫は危険なる最後を有す。(シエクスピア)

吾人にして常に周到緻密の用意を備へ明快の頭腦を有し剴切なる判断力を缺かずに居たならば、吾人をして成功を奏せしめ若しくは自己の逆境を一轉して、成功を見るに至るべき運命を奏するに至ることは、掌を反すが如くに容易なるものである。若し然らずして、自己の眼を動かすに敏活ならず、機會に投するに於て極めて、冷淡であつたならば、遂に成功の端緒を握ることが出来ないは勿論、終に自己の有用なる才幹をして萎微、薄弱に終はらしめ、失意暗々の裡に彷徨する身となるに至る。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

一月二十七日

美者自ら美とするも、吾れ其美を知らず。悪者自ら悪とするも、吾れ其悪を知らず。

(列子)

人間は妄りに私智を以て、善悪を分別し、美醜を判断すると云ふことは、至人の大道より之を觀れば、只々抱腹に過ぎないことである。例令ば、今茲に、世に所謂美人ありとし、自ら美として其の美に誇るも、此大道より之を觀れば、其の美人である所以を知らぬのである。醜も亦然りである。古來我が國にては所謂富士額を取つて美人と爲せども、支那にては然らずして廣額を賞するものである。斯くの如くにして大道より觀れば其の他の諸點の如きも眞美なりとする點を見出さぬのである。要するに美、醜等は小區間に行はる、管見に過ぎないのである。



一月二十八日

世辭で丸めて浮氣で捏る。

(俚語)

斯くて捏ね上げたる浮世は面白く、それで色彩られたる人生は美しいので、若し此の混和物を去り、此の色彩を除いて、其の現實を暴露せんか、喧嘩、口論、衝突、軋轆、二た目と見られぬ浮世の状態となるは必然である。世渡りの上手と云ふは巧みに、有害の範圍を超越したる、虚言を吐くにあるのである。人生の落伍者として呻吟しつ、ある人ほど眞情吐露せし人に多いのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

一月二十九日

父母の年は知らざるべからず、一は以て喜び、一は則ち以て懼る。

(論語)

世間には、父母の年が何歳なるやを知らざる者があるまい。父母の年を知つて居れば、其の長命なのを見ては喜び、其の衰へたのを知つては餘命少きを懼れ、喜憂交々至つて親を愛するの情、自ら已むこと能はざるものがあるであらう。父母の年を知るは孝道の一つである。



一月三十日

奇則ち過ぐれば凡。

(王世貞)

天下に奇を好む者あり、何事も人の意表に出でんことを欲し工夫惨憺至らざるなけれども、前提の言の理を解せずして、只管人を驚かさんことをのみに腐心して、却つて工夫の眞の妙談に入らざるものあるは、甚だ憐むべきものではないか。須らく自省する所あらんことを望むのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

一月三十一日

真理の本質は平易、明瞭の二者なり。(ミルトン)

我が國民道德の神髓たる忠、孝ほど、平易明瞭なる真理はあ
るまい。新しい男や、新しい女達は、現代は過度期に屬し
舊道德は其の權威を失つて、新道德は未だ起らぬなどと言つて
居るが、忠孝の道は舊くして常に新しい道德である。勿論道
徳は時代に依つて變化する。然しそれは内容の變化、即ち手段
方法の變化であつて、形式即ち君に忠、父母に孝と云ふことは
萬古に亘つて渝らないのである。



二月一日

此際一たび屈せば、復た伸ぶべからず。

(胡澹庵)

胡澹庵は宋の名臣であつた。當時宋は財政非常に亂れて、窮
乏の極であつた。處が秦檜と云ふ者權勢を擅いまゝにして、金
で和議を計らうとした時に、奮然起つて秦檜を彈劾して遂に其
の名を全ふしたのである。今の青年、此の言と對して恥する所
なければ至幸である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

二月二日

君子は其の獨りを慎む。

(中庸)

「獨り」とは人の知らざる所であつて、己れ獨り知る所である。即ち人欲の將に萌さうとする所である。此所を常に戒めて懼れねばあらぬ。精神修養の秘訣は「動機」を慎む點にあるのである。



二月三日

尺も短き所あり、寸も長き所あり。(史記)

梅は薫りはよいが、花は美しからず。櫻は花は麗しいが、香は宜しくない。斯くの如く、強ひて缺點を求めて、取るに足らずとし捨てたならば、天下に何物も取るものがなくなるであらう。又世の中には全然無用の長物もないから、一技一藝を求めて之を用ふるとするならば、天下に棄つるものは無いのである。須く物は一悪なりとも捨てず、一善であつても一切を取らずして、要は適所に適材を用ふるにある。

一日一訓を守れ

一日一訓守

二月四日

鬼の目にも涙

(日本俚諺)

情ある心を以て世を渡れ、人を見ること敵の如くあるな、友の如く情ある、親切な心持を以て、世を渡つて欲しい。電車に乗つても、荷物を持つて居る者があれば、席を譲つて「此所が空いてあります」と云ふべし、怒つた顔をして睨み合ひ、泥棒であるか「如く爲たくないのである。或は泥棒であれば警察が厄介を見る、自分は矢張り、世は情けの觀念を以て、世を渡り度い。斯くてこそ、鬼の目にも涙の閃きが見ることが出来るのである。



二月五日

賣家と唐様で書く三代目

(川柳)

盛者必衰は天の配劑、入り代つたのはもとの貧乏人、貧富転、苦樂循環長い目で見ねば解らぬ人生、速断はチト出来兼ねるが、一體金持が自分一人で儲けたと思ふが、そもく失敗の初り、金の敵の世の中が、暫く敵を汝の倉庫に追ひ込んだので云はゞ社會が儲けさしたのに外ならないから散じて社會公衆の爲めにしてこそ、金の價値もあれば尊敬すべき富豪の態度となるのである。世の成金輩、子孫長久の爲め、唐様で書かざる豫防注射として公共の事業に喜捨すべきである。

一日一訓を守れ





一日一訓を守れ

二月六日

犬歸りて其の吐きたるものを喰らう。

我々も過失、又は不正行為の秘密が現はれんとする時、又は既に顯はれたる時に、非常に怖れ戦き、何とかしてその制裁を逃れんとして煩悶辛苦する事、犬と同じ有様である。自己が斯かる行為をしたる原因を深く考ふる所なくして、目前の刑罰のみを苦にするのである。即ち我々は願ふ所の善は之を行はずして、願はざる所の悪を行ふことは全く罪の力である事を自覺せぬ故に、犬の吐きたる物を又食らう如く、再三再四同じ過失を繰り返すのである。



二月七日

仕事を追ふて、仕事は追はるゝ勿れ。(大和格言)

用意周到の人は仕事を追はるゝの人にあらず、突如として火災に圍まるゝも、若しくは大危険のために襲はるゝも、安んじて自己の盡すべきを盡し、義務を果すに於ては一步だに狂ぐる事なく、泰然として最善を爲し、狼狽頓挫を演ずるに至らず却つて平日に優るべき沈着の念に依つて、之れを處理するが故に、自己一身に取りては、毫も危険の切迫したるを知らざる如くである。要するに何人と雖も、何時にても準備心あるを必要とするのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

二月八日

貞女兩夫に見えず。」

(讀人不知)

女と生れては王の御手にもまかれじと猶、自己の貞操に對する堅き決心を持たなかつたならば、其の身を全ふすることは出来ぬ。元來、夫婦は二にはあらず、一體なり。神の合せ給へる者は人之を離すべきものでない、姦淫の故ならで其の妻を出し他の女を娶る者は、姦淫を行ふのである。又出されたる女を娶るも亦姦淫を行ふのである。



二月九日

道は通しと雖も、行かざれば至らず、事は小なりと雖も、爲さざれば成らず。

(荀子)

彼の陸奥宗光の父自得居士、初めて義山和尚に相見して「禪の道畢竟如何」と尋ねた。和尚は無言で、突然、自得の横面を撲つた、自得は大いに怒つて次の間に下り、和尚を斬つて捨てようと苛立つた。其處へ和尚の弟子共出で、之を慰撫て茶を薦めた。自得は茶を飲まうとすると、件の弟子は矢庭に其の茶碗を打ち落して「道如何と問ひ詰めた。不意を食つて自得は、唯だ呆然として居ると、弟子は「道とは斯んなもの」と、懷中から手拭を出して、綺麗に拭いたと云ふことである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

二月十日

餅屋は餅屋。

(俗 諺)

職業撰定の當否が、自己の成功を奏し、自己の運命を開拓し
或は自己最良の機會を捉ふるに對し、殆んど死活の權を有する
ことは當然の事である。然るに若し、此の一事に於て失敗せば
如何に身命を賭して悪戦苦闘を爲るにしても、宛然、大空に向
つて拳を揮ふと同じ事で歸する所は徒勞に終はるのである。さ
れば職業の選定は決して輕視すべからず。



二月十一日

引きそめし心のまゝに梓弓

思ひかへさで年も經にけり。

(源 賴武)

事に着手するに當り、退いて其の動機を察すべきである。こ
の事を始めたるは、何の爲めか、名を沽る爲めか、利を得る爲
めか、他の誇る爲か、熟考を重ねたる上、動機正しければ、成
敗は前途に委して大に努力すべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

二月十二日

裸一貫。

(日本俚諺)

諸君は父母より財産を譲り受け、親戚朋友の援助を取り、今日の地位境遇を取り、衣服を取りて、裸一貫としたらば如何なる方法を取らんとするか、其の時自身の味方となるものは、恐らく我が身に具へた、自己一人の力量、才能の外はないのであらう。自立自活の力こそ、眞の我が身の資本である。



二月十三日

世渡りは浪の上行く船なれや

追風よきとて心ゆるすな。

(失名)

成功の岸が見え始めたる時は、人生の最も危き時である。月給の昇り初めは驕り癖の萌す時である。名の公に聞え出す時が慢心の發する時である。人が賞める頃は心の怠り初めた頃である。時候の變り目には、自重自愛せざれば風邪に犯さるゝものと知るべし。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

二月十四日

ナポレオンは平凡の代表者なり。(コンコルド)

平凡の中に特色あり、平凡の中に大處あり、平凡の中に完全あり、平凡の中に真善美の具備ありて、此に始めて人心の満足があるのである。コンコルドの言の如きは、平凡の大なる者を権現して、之を一身に集めたる太平凡人の解剖を誤らざりし適證にあらずや、佛教の賜たる大慈大悲の觀世音菩薩は又大平凡の佛身を以て平凡なる人心を平凡なる安心に導く所以ではないか。



二月十五日

無い袖は振れぬ。

(日本俗語)

古來、餘財なくして、親族の災害をも傍觀するの止むを得ざるに至つた、情緒に於て幾多の涙を語るものである。吾人は須らく其の間の消息を明かにして、有る袖を大に振るべき準備せざるべからず。其の準備とは他なし「勤儉」の二字である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

二月十六日

能く之を行ふ者は、未だ必ずしも能く言はず、能く言ふ者は未だ必ずしも能く行はず。

(史記)

言と行とは一致するものと、せざるものがある。能く、行ふ者は、能く言ふことを得るかと言ふに、能く行ふ者は必ず能く言ふものなりと、斷言することは出来ない。中にはよく行ふことを得るも、能く言ふことの出来ない者もある。或は又、能く言ふは、能く行ふことを得るかと言ふに、言ふことを能くせざるものもあるから、言ふ者必ず行ふ者など必ずすることは出来ないのである。



二月十七日

智と勇とは車の兩輪の如し。

(漢書)

一身にして智なければ、一身亡ぶべく、一家の主として智なくんば、一家族皆苦しむ。普通世上に於て運とあきらむる處にも、智の有無に關することは極めて多いものである。勇は戦争に最も必要なるは言ふまでもない。されど、觀じ來れば社會も一種の戰場である、勇氣なければ、仁者でも其仁を施すことが出來ず、智者もその智を失ふに至るものである。智勇兼備してこそ、社會の勝者となることが出來るのである。

一日一訓を守れ



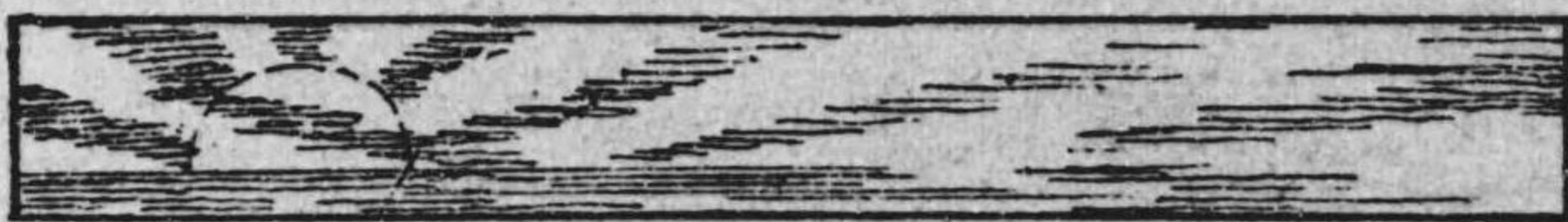
一日一訓を守れ

二月十八日

善く遊ぶ者は溺れ、善く騎するものは墜つ。

(淮南子)

善く游泳する者は、其事をしばしして、遊ぶになれ、善く馬に騎るものは、其の事をしばしして騎するに至るものである。故に遊ぶ者は、水の畏るべきを忘れて戒めず、騎する者も亦馬の畏るべきを忘れて慎まないことどもが往々ある。されば却つて遂に溺れ。馬より落つるの難に遭ふことがあるものである。されば吾人も小成を得たりとも慢する心を出さず、將來を期して堅志勇往すべきである。



二月十九日

禍も三年経てば役に立つ。

(日本俚諺)

今より三百年前、希臘のアポロニユース、ベルギスと云ふ者始めて尖圓形の測法を查出せしが、其の當時は、誰しも有用なりとも思はざりしが、後にこれを修明し、天文学の根底となりて、今日にては、航海する者をして、之に依りて未だ前知せざる、海洋を進み行き、天上を踪跡し、程路を錯らずして、豫期する處の港に達することを得せしむる、最要の學術とはなつたのである。されば、吾人も日常小事なりとも、無益なる如く見ゆる事も、終には却つて多大の利潤をなすものであるから、事物の大小に關せず輕視せずして其の取捨を誤らざる事を期すべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

二月二十日

生死路頭君自看、活人全在死人之中。(東山外集)

一度死んだ人でなければ、眞の活人とは云はれぬ。さて死と云ふことは、自我を斷滅して、心に些の束縛なく、絶對自由の境界に達し、坐せんと要すれば則ち坐し、行かんと要すれば則ち行くの生活である。總て修養の目的は、死んで生くるのである。自己の小我を滅却して、絶對の理想我を體得するにある。無念の念、無想の想に住するが、大死一番底の人である。

二月二十一日

天地之大德を生と云ふ。

(易)

此の生々の徳は即ち進化向上である。果して然らば人生は向上の爲めの活動である。生命は此處にある。元氣は此處にある。生存の價値は此處に在る。個人の進歩、國民の向上、國家の發展、亦實に此處に存するのである。人生は活動に始まり、活動に終る。吾人、青年たるものは、希望と元氣と勇敢とに生きねばならぬ。



一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

二月二十二日

角を矯めんとして牛を殺す。

(日本俚諺)

利になるものは害にもなり、薬になるものは毒にもなるものにて、一利一害と云ふことは、三尺の童子も知子も知つて居るけれども、小利を見れば、大害あるをも打ち忘れて、之を取らんとし、小害あれば、大利ありとも之を棄てんとす。斯くの如きは、角を矯めさんとして、遂に其の牛までも殺すが如き愚を演出するのである。されば吾人も自ら省みて悔えと残すことな
かれ。



二月二十三日

天下を以て人に與ふるは易く、天下の爲めに人を得るは難し。

(孟子)

天下の大を以て、人に譲り與ふるは、難い事であるやうであるが、其の人の決心に依りては、爲し難きものではない。之れに反して、天下の爲めに、人物を擧ぐると云ふことは、易々たることの様であるが、其の實頗る難き事である。而して、之を簡擇するの智、之を知るの明、之れを服せしむる徳等が備はらなかつたならば、決して其人を得ることは出来ぬものである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

二月二十四日

苦に病むな金は世間に預け置く

欲しくば與らう働いて取れ (讀人不知)

富の神「ブルース」は、天帝より來る時は片足曳きつて來るが、惡魔の來るのは驅足で來ると神話にある通りで、之を正直に働いて儲け出さうとすれば役々營々、額に汗して些か宛しか得られぬのであるが、詐欺や其の他の不正手段で得やうとすれば、太く短く攫み金、迅いことは此の上ないが、又驅け出すも迅い。不義の榮華は浮べる雲、矢つ張、役々營々、稼ぐに追ひ着く貧乏はないのである。



二月二十五日

屢々撃てば樞も倒る。

(獨逸格言)

人の職務に於ても、學問技術に於ても、人事百般の事物に於ても、小事を精密に觀察することは、其の事を成就せしむる要素である。蓋し世に在る學識智見は、古より今に至るまで、零細なる實驗の蓄積の結果に外ならぬのである。アルピオンの峭立せる白石巖は、沙蟲の白殻より成つたのである。屢々撃てば微力なりとも堅壘を抜くことが出来るのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

二月二十六日

窮居志を求めて達して道を行ふ。

若責を塞がずんば真に天に負く。

(陸放翁)

何れの世に於てか、此の如く感ずるの人、即ち多きを得ん。

窮居すれば不善を求め、達すれば不義を行ふ。滔々たる天下皆

之れである。

殊に現代の青年は、或は放浪生活を逐ひ、耽りに流れ、或は

無宗教、無信仰、没道義、没常識の極に達し、自ら次第の國民

として國家を擔當するの責任と義務とを解せないものがある。

三省するなくんばあらざるなり。



二月二十七日

百尺竿頭一步を進む。

(傳燈錄)

招賢大師曰く、百尺竿頭動かざる人、然し得入すと雖も、未

だ真と爲さず、百尺竿頭須らく一步を進むべし、斯くすれば十

方世界是れ全身と、人も何事を爲すにも、是れにて最早完成せ

りと云ふ時、尙一步進むで更に無缺の域に達せざるべからざる

なり。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

二月二十八日

明日は何を衣、何を飲まんとて思ひ煩ふ勿れ、ソロモンの榮華の時も、野の百合花に如かざりき。(英國格言)

煩悶に煩悶して、遂に向上精進の道を發見せざる者は不幸の極ではないか、煩悶必ずしも不可ではない、心配も亦必ずしも非ではない、唯、心機一轉して、清新潑測の新生面を開く工夫之に伴はざるを不可とするに外ならぬのである。



三月一日

千歳を觀んと欲せば則ち今日を審かにすべし。

(荀子)

一葉落ちて天下の秋を知るに明、山を隔て、煙を見て早くこれ火なることを知るは察、苟も明と察とを以てす、何ぞ、殊更に過去に囚はれ、現境に縛らるゝの愚を爲さんやだ。玉は泥中にあつても其の光を失はず、錐は囊裡にあつても其の銳を示す愚圖くするのは矢つ張り自分の技倆の足らざるが爲めである

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月二日

教育は紳士を創造し、讀書は良友を創造し、而して反省力は完璧の人を造る。
(ロツク)

獨逸の小學教師ジョン、トレボニアスは、兒童の前に出る毎に、脱帽して敬禮するを常とした、而して曰く「誰か此中より大學者、大政治家の出ないと云ふ事が出来やうか、否一國の帝王が此の中に潜み居るかも知れない」と氏の言空しからず、歐洲無冠の帝王、宗教改革者なる、ヤーテン、ルーテルは、此人の膝下より出たのである。



三月三日

凝つては思案に能はず。

(日本俚諺)

天下の事、一として餘裕なかる可からず、餘りに窮窟に、餘りに切詰一杯に計畫したる事業は大を爲す所以ではない。餘りに性急に、餘りに齷齪たる人物は、其の前途知るべきのみである。大漠を行く者も、沃地あるが爲めに元氣を恢復し、荒原に佇む者も野花がある爲めに旅愁を忘却するのである。凝つても思案し能ふ餘裕無きは成功の門扉を開くに容易ならしむる手段にあらず。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月四日

下る程其の名の揚がる藤の花。

(失名)

藤樹先生を詠んだ句であるが、自分が重くなるほどのし上る人は、心の實が入らぬからである。驕る平家は久しからず。驕慢は人の最も慎むべきもの、謙遜は身を保持するの道である。



三月五日

精出せば氷の間もなし水車。

(蓮文)

阪路は階段があると、昇つただけで後戻りすることはないが、だんだら阪では、前へ進まねば其の車は後へ戻る、一寸も油断は出来ぬ。勢よく絶えず廻つて居る水車は氷が張らぬが、遅々として廻る水車には、氷が張るではないか、遂には翌朝になつて廻轉不能になるものである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月六日

失意の人に對しては、得意の事を談ずる勿れ。得意の日に在りては失意の時を忘るゝこと勿れ。(格言聯璧)

萬事意の如く成らずして、失意の境地に煩悶しつゝある人に對しては、自家得意の事などを談ずるものでない。之れを談ずる時は、益無きのみならず、彼れの失意を愈々深からしむるものにて、遂には我を嫉み、我を忌むやうになるものである。又自家得意の時にありては、氣傲り心滿つるを以て、過失を招き易いものであるから、是の時に在りては、失意の當時の苦境に呻吟してをつた時を想ひ起して、身を慎み、恭謙の徳を守つて事に望むべきである。



三月七日

冷眼人を觀、冷耳語を聽き、冷情感に當り、冷心理を思ふ

(菜根譚)

人を察するには、冷眼にて之を觀ざれば、人の善惡を辨ずることは出來ぬのである。言説を察するには、冷耳にて之を聽かなければ、言説の是非を判ずることは出來ぬのである。又、冷情もて感に當らざれば、其曲直を察することが出來ぬ、即ち冷心をもて事裡を考究しなかつたならば、其の利害を知ることが出來ぬ。すべて心情熱する時は、事に激し易く、物に迷ひ易きを以て、判断識別の正を失するのである。視、聽も亦然りである。故に何事に對しても熱し過ぎざるを最善とするのである

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月八日

善因、善果、悪因、悪果。

(古 諺)

禍は妄りに来るものでなく、其の来るべき理あるのである。福も亦徒に來るものにあらずして、其來る亦來るべき理がある。蓋し其原因は何れも、各自に招く所であつて。善果、福を得んと欲せば平常、良心の許容する行爲を爲すべし。又之に反して悪果の來るは悪因を醸すによるのである。事は卑近なりと雖も亦人生行路上不朽の羅針と爲すべし。



三月九日

氣に入らぬ風もあらうに柳かな。

(讀人不知)

管に姑に柔順な嫁のことばかりではない、大丈夫も柔を守るが眞の強者である。漢の高祖は、僅かに兵十萬に將たる大將に過ぎぬと云はれた人であるが、後に至つて終に項羽を亡ぼしたのであつた。柳の強みは、其の弱くして強い所である。柔能く剛を制するは、之れ即ち柳の徳である。

一日一訓を守れ

一日一訓を守れ

三月十日

七轉び八起き。

(日本俚諺)

神は決して倒したまは置かぬ。捨てる神あれば助くる神もあるから、決して失望することは要らぬ。庭前の枯れたる芝生を見よ、霜雪に枯死したと見るは僻目、新春の光と共に天恵の露とを得て、再び若草と萌え出るのである、窮すれば通じ、悲しむ者の慰めらる、は、天道循環の理法隠微を鑑たまう神の攝理である。七轉び爲したりとも次ぎの一回にて起きよ、起きて前歴に徴して再び轉ばざるの準備を爲すべきである。



三月十一日

心眼を開くべし。

(ジエアミ、テラー)

地上に林檎の落つるのは、誰人も之を見る處であるが、心眼を以て之れを視たる彼れニユートンは、其處に「引力」の存在することを見出したのであつた。凡人が單に、肉眼を以て看過して居た事も、ニユートンは更に、心眼を以て視たのである、肉眼の明を有する人は世に多けれども、心眼の失明的の人の多きは歎くべし。心眼の有無は之れ實に凡、否の分岐する所以である。

一日一訓を守れ





一日一訓を守れ

三月十二日

藝術は長し、生命は短し。

(ゲーテ)

生ある者は必ず滅す。然し吾人が生前に於てなせる事業と、
修養せる思想の光には、多くの人に感化影響を與へるものであ
る。即ち或は有形的生活に於てし、或は無形の精神生活に於て
する。是れ即ち吾人永遠の生命である。吾人後世に傳ふべきは
千百萬の富にあらず、只々人格の力其のものであることを記憶
せよ。



三月十三日

所謂る其意を誠にすとは、自から欺くなきことなり。

(大學)

約束を履行すると、爲ないとの關係は、頗る倫理學の智能を
要し、併せて亦常識の判断を要するのであるから、茲に於て、
我々は學問ばかりで、常識の修養が足りないと云ふと實行すべ
き約束を實行しなかつたり。或は實行すべからざる事を實行す
るやうな事が屢々あるのである。故に充分考慮を要するのであ
る。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月十四日

汝猶ほ其の一を缺く。

(聖書)

我が國商工業界は、今回の歐洲大戰亂の結果、端なくも其の生産能力の大缺點あるを見出し、今や其の補償に努力しつつあるは實に喜ぶべきである。

吾人、處生上に横はる百般の事物に對して尙、一を缺くに非らずやとの、不斷の努力を發揮して、其の欠點を見出すと同時に其の進轉を期すべきである。



三月十五日

永くこゝに命を配して、自ら多福を求む。

(詩經)

始終一貫、天地の公道を踏み、權勢に阿附することなく、又強ひて疎隔することなくんば、天は其の人に多福を下すものであらう。假令、物質的の幸福を得られぬとしても、心廣く體胖なる清福を得ることが出来るのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月十六日

百日の照にはあかで、一日の洪水にあく、

(日本格言)

種々な工夫で積み上げた修養も、僅に一時の怒氣の爲めに破壊されて了ふことがある。是は僕等が常に見ることで、怒氣を抑制することは、一見平凡らしくして、而も極めて大切な事であると同時に至難なる事と云はねばならぬ。



三月十七日

星の昭々たるは、月の殫々たるに若かず、小事の成るは、大事の廢るゝに若かず、君子の非は、小人の是よりも賢し
(晏子)

星はきらりと光を放つては居るが、月の薄曇りの明るさに及ばぬのである。平生善行のある君子の非行は、小人の善行よりも儘つて居る。其れに反して小人の善行は、平生の悪行に比しては善事であるに過ぎないのである。されば之れを君子の行ひとしては、何等の價値を認めぬのである。故に吾人は大なるものを以て目的とせねばならぬのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月十八日

兩頭ともに切斷して、一劔天に倚つて寒し。

(明極禪師)

兩頭とは、君とか臣とか、生とか死とか、相比較すべき事、即ち相對差別のことを云ふのである。人が若し此の別差觀念を截斷して、生死一如、彼我無差別の當體を冷暖自知することが出来たならば、一劔紐なくして天に懸れるが如く、與奪縱横である。されば吾人は如何なる事を爲すに於ても此の兩頭を斷つことに依つて徹底的觀念を修養して進むべきである。



三月拾九日

人を救へば我身が浮ぶ。

(日本格言)

平素人に交はるに篤き心と、親しき言を以てすれば、是れぞ單に他人を利するのみならず、自己の周圍を善良にするが故に牽ては、自己の利益ともなる。自身が善意、善行、善根を周圍に放てば、周圍は早晚必らず之れに應ずる。他人の善を見るは己れの善を發揮し、人の善を惹起するものである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月二十拾日

後生大事や金ほしや

死んでも命のあるやうに。

(読人不知)

不死の願望、永生の要求は人心の自然に發したる聲にして、
應て宗教なるものを産み出し、靈の不朽や、生の存續を憧憬せ
ずには居られぬが人情である。即ちそこに永遠の希望も湧き、
不斷の慾求も生じて、人の世の中は斯くてこそ日進月歩、進展
を見ることが出来るのである。



三月二十拾一日

人至つて賢ければ友なし。

(日本俚諺)

人も餘り、黑白、善惡を嚴に、分けへだてを付けるものは、
大なる器量の無いものである。故に清濁合はせ呑みて餘り人の
撰り嫌ひを付けず、又、寬嚴其の中庸を取つて、是非を分け、
身は一見愚なる如くに見ゆるけれども、身を慎み行くべきであ
る。斯くの如くは、社交的他歩を進め得るのである。古語に
も水清ければ魚棲ますと云ふはこれである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月二拾二日

満つは損を招き。謙は益を受く。 (書 經)

物己に充滿すれば、其上に増加すべき餘地のないと同じく、心が己に満ちて優れりとするならば、學問と事業とを問はず、總て、進歩を見ることは出来ぬものである。増加せざれば減損し、進歩せざれば退歩すると云ふことは、自然の理である。之に反して、己れを屈して謙遜であるときには、益を受けて益々進境に嚮ふものである。されば謙讓の徳を積まれんことを期すべきである。



三月二拾三日

地獄の沙汰も金次第。 (日本俚諺)

財産は品位の標準、月給の高下は人格の高下、収入の多寡は技能の巧拙、一から十まで金で定めて金さへあれば、馬鹿も利巧に金がなければ利巧も馬鹿に見ゆる世の中であつて、人も智あるを以て貴からず、金あるを以て貴しとして成金の一語、國語辭典に新刻する現代となり終はつたのである。然れども如何に地獄の沙汰も金次第とは云ふのも、浮雲の富は吾人の興せざる處と知り、黄白を集散する自から道あることを知るべしである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月二十拾四日

わきて見ん、老木はいと哀れなり、

今幾度か春にあるべき。

(西行法師)

享樂主義より見れば、幾と悲哀の極點である。自己實現主義よりすれば、老木を惜みて、併せて餘命幾くもなきに鑑み、尙努力一層すべきの意義を發見すべく、或は博愛主義よりすれば、殘年長からざる老木に對し、殊に之を慈しみて、其の久しく風殘雪虐に堪へたる榮譽を稱讚するに深く意を用ひ、情を籠むべきを詠じたるの義に解すべし。而して吾人は茲に至りて憶ふ、惜春の情を叙して、徒らに紅顏の改まるを悲しむのみを事とし、遂に白髮の爲めに之を勵まし、之を慰むるの同情なきものは、其の眞興を解する者でないことを。



三月二十五日

怒は敵と思ひ。

(家 康)

議論に負けたとて怒り、飯が強いとて怒り、悪口されたとて怒り、思ふまゝにならぬとて怒り、失敗したとて怒り、一日の中にも幾度となく怒るではないか。之れを神や佛が見たら、丁度落栗に斧振り上げて怒つた蟪蛄のやうなものであらう。短氣は損氣なりとは卑近なれども箴とすべし。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月二十六日

淵に臨んで魚を羨まんよりは、退きて網を結ばんに如かず
(漢書)

淵に臨んで淵中の魚を得んことを望み、徒らに涎を垂らすも魚は料理せられて、口中に入るものではない。されば、空しく羨望せんよりは、退き去りて、魚を捕獲する網を作るに如かざる如く、總べて世の事物に對しては、徒らに羨望するも、何等益の無いことであるから、寧ろ之等を進取開拓する方法を講じ其の實行に勉むべきである。



三月二十七日

人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し。

(家康)

世人は「巧遅は拙速に如かず」などと云つて、お手軽な早速主義を喜んで、馬のやうに尻尾振り立て、急いで行く。であるから、途の半ばにも達せざる中に、躓いたり、轉んだり、さては負ふた荷を轉したりする。それでは拙速どころか、破滅消滅である。牛歩主義、歩、一歩づつ、怠らず、急がず、行くこそ萬全にして、加之も巧遅にあらすして巧速である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月二十八日

韓信が肱を潜るも時代と時節

踏まれし草にも花が吹く。

(俗 語)

若し韓信が彼の時、腰間の秋水一閃、無頼漢を斬り殺したとしたならば、韓信は斷頭臺の一露と消えたに相違ない。人間萬事忍耐に在るは、韓信が絶好の標本である。凡て何事によらず成功の實は辛抱の木に結ぶものである。



三月二十九日

一を聞いて十を知る。

(日本俚諺)

宇宙の森羅萬象は物質個々別々の總計なり。之を綜觀すれば天地萬物、之を分析すれば、即ち元子の一に歸するものである。人間の萬事も亦此くの如きもので、如何なる出來事でも、皆之を一心に發するのである。
であるから一を知れば十を知る勿論、萬に通じ得るので、萬を知れば一を識ることは出来るのである。而して之に處する道も亦自然茲に生ずるのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三月三十日

天道は親なし、常に善人に與す。

(老子)

此の身は有限にして、此の心は無限を辿り、此の世は缺陷にして、我が希望は圓滿、萬事意の如く、爲ること作すこと思ひのまゝにならぬが浮世、とは謂へ、善人の前面には常に天道が展開して、其の人々の進むを迎へむとして居るのである。



三月三十一日

心地上風、濤なくんば、在るに随つて皆青山緑樹、性天の中、化育あらば、處に觸れて魚躍り鳶飛ぶを見ん。(漢書) 人は自己本然の性に修養を加へ、其の意志は眞に自由にして輪廻の妨ぐる所と爲らず、其の行動は何等物慾の羈絆を受けざるに至りて、初めて活動の自由を得ざる可からざるの必要を生ずるものである。既に物界に在りて物界に超越し、心界に在りて心界の秘魔を打地し、擾々忽々の境を脱せん乎、之あるに於て吾人は、青山緑樹を眼前に展開せしめ、心身自から駘蕩たるを得て、福祉随つて多く、慶幸随つて長きを致すことが出来るのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月一日

君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草之れに風を加ふれば必ず偃す。

(孔子)

人の上に立つ者は風である。其の風の吹き次第に下の人は靡くものである。而して少し位の悪事は看過し、善事は少しの事でも必ず、褒めるやうにせねばならぬ、須く上に立つ者は、如何にせば人は働くかと云ふことを考究すべきである。俚諺にも「人を使へば苦を遣へ」とある如くである。之れ下を靡かすべし唯一の手段である。



四月二日

負けて退く人を弱しと思ふなよ

智恵の力の強き故なり。

(失名)

之れ、眞の男子の態度であらう。男もこの點まで思慮が進むと、深沈重厚の資と、磊落雄豪の質との撞着が消えて來るのである。斯くなると、羊の様におとなしい性質と虎の如きたけき質とを兼備する人格が出来るのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月三日

古の善く事を制するものは禍を轉じて福と爲し、敗に因つて功を爲す。
(史記)

古來の成功者には此の消息を傳へて居るものが多い。セシルローヅは肺患のために南亞に轉地して大帝國の礎を築いたのであつた。

禍を禍として屈托しても福には成らぬのであるが、一轉機を捕へれば、樂地は其の眼前に展開して居るのである。



四月四日

文王を待ちて、後與る者は凡夫なり、豪傑の士は文王なしと雖も、尙與る。
(孟子)

獨立の意志ある者は、能く人を致し物を致すものである。彼の常に外物に拘泥して、其の左右する所となるものは、畢竟、意志の獨立自在を有せざるが爲めである。此の輩は一時、辛に順境に立てば、直ちに意滿ち、志驕るのであるが、一旦、逆境に陥ると、逡巡してしまつて何事も出来ぬ。風のある間空に飛揚し、風息めば汚土に委する紙鳶と同一である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月五日

道心に衣食あり、衣食に道心なし。(漢書)

衣食を主とすれば道心を失ひ、道心を主とすれば衣食を失ふ。食ふ爲めに働けば道義の心を失ひ、行ふ所を道とすれば、生計は自ら立つて行く。不公平なやうでも公平なのが、即ち世の中衣食を計るものは業疎かに、衣食を念とせざるものは業に精し業に精しき者は世の求むる所既に求むる所に應ずるのである。其の衣食に窮せざるは寧ろ、當然である。而して、衣食のために因はれば俗悪に流れて至妙に至ることは出来ないのである。實業道德の極致は即ち茲に在るのである。



四月六日

人見て法を説け。

(日本俚諺)

智は心の糧、慧は心の働き、智あつて慧なければ、氣轉はさかぬ。「御注進」と花道より驅け出したる役者が、臺詞を忘れて、モジ／＼するをそれと覺つて「近う」と呼び寄せ、小聲で「何うした」忘れました」さうかとはかり聲を張り揚げ大儀であつた、行け」と其場を繕ひし大立物の氣轉は名優の手下として今も語傳へらる。之れ即ち人見て法を説きたるの人なり。實業に従事せる子弟青年の此の要、一層切なるを知るべし。

一日一訓を守れ



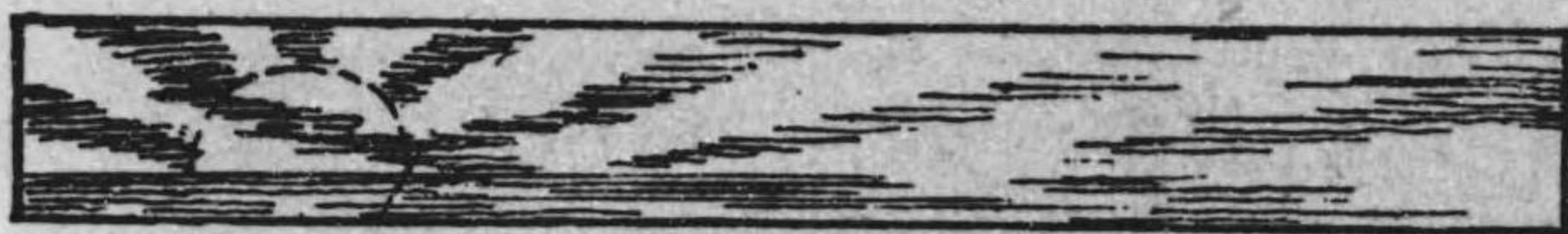
一日一訓を守れ

四月七日

仁が仁聞あつて民、其の澤を蒙らざるものは先王の道を行はざるなり。
(孟子)

徒らに理想にのみ憬がれては現實に疎く、妄りに現實にのみ縛られは發展の餘地がない。理想と現實と調和は何事にも必要である。

殊に人の上に立つものが、此の現實を透視するの明がなかつたならば、上情は下に通せず、更に何の反響がないものである。されば人の上に在るもの心すべきは前提孟子の訓言である。



四月八日

聖人に夢なし、馬鹿に苦勞なし。
(日本俚諺)

苦勞なければ樂もなし。苦も樂もなければ生甲斐もない。才を待んではあぶなく、愚を守つては、埒が明かぬ。腹に萬斛の才を貯へ、出すべきに出し、守るべきに守る、大賢の愚に似たるは其の守るべきに守るを云ふのみである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月九日

外よりは手もつけられぬ要害を

内より破る栗のいかな。

(読人不知)

栗のいが其の物も強きを助くるのであらうが、これが力であると思ふ大間違である。力は内に在る確信と、この確信を實行する爲めにあらゆる障害に堪ゆる意志である。而して斯くして得た力が眞に強き力である。眞のは内に發し、内に練られ、内に磨かれ、内に養はれ、内に貯へられ、内より溢れて外に流れるから、十分餘裕がある。故に内、已に克つものは外、世界にも勝つことが出来るのである。



四月十日

富んで驕らざる難し。

(シロセ)

富は其の活用如何に依つて、富其の物の光輝を添ゆるものである。吾人は富を得たる場合には、慎んで、驕傲自負を避けねばならぬ。人が分に安んじて患難を忍ぶを難しとする如く、富んで驕らざるものも亦難いのである。富者は、須く苦樂盛衰は現世の蘇塔婆にして、人事の轉變の急であることを知つて、運命の不確を悟りて、堅忍持久、富をして層一層光輝あらしむることを努めねばならぬのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月十一日

自惚れと傲氣のない者はない。

(日本俚諺)

人は自惚れあつてこそ、臆面もなく活動は出来るものであるが、兎角、自分のことは買被つて他人のことは割引して見たがるは悪い癖である。

世に立つには多少の自信がなければならぬ。自信と自惚れとは隣同士、實力と評價との相当する程度までは、確かに自信と許されるが、少しでも其の程度を越せば自惚れとなるのである。自惚れとなれば最早、發展の餘地なきに至るものなれば、須く自信の程度に止め置くこそ緊要である。



四月十二日

愚者は他人の過ちを發見するも、己れの過ちを發見するすこと能はず。

(シセロ)

人の眼は外に向つて開かれて居るものであるから、動もすれば他人のみを見て、自己を省ることを忘る、人がある。好んで他人の非を發き、之れを嘲笑し、罵り誘つて、心竅かに快哉を叫ぶが如きは、之れ即ち愚者、小人の常である。斯くの如くして自己を省ることを爲さざるの徒は澤山ある。自己を省みて自ら修むる者は、人を見て彼是れ批評などすべき隙もないのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月十三日

人、剛を好めば我れ柔を以て之に勝ち、
人、術を用ふれば我れ誠を以て之を感じ、
人、氣を使へば、我れ理を以て之を屈す。

(格言聯璧)

他人の我れに對するに、剛強を以てする者あるときは、我れも亦剛強を以て之に接せば之を屈することは難い。只柔を以て之れを制すべきである。他人の我れに臨むに、術數權謀を以てするものあるとは、我れは、誠意誠心を以てして、我が徳に心服せしむべしである。又他人が氣を使ふて、我れを壓伏せんとする者あるときは、我れは正しき道理を以て之に應じて其の虚傲の氣を屈すべきである。



四月十四日

時間を利用せよ、一分を失ふは一時を失ふなり。

(フランクリン)

短い時間なりとも、之を浪費するは、長き時間も活用することが出来ぬものである。従つて又大發展大成功したる人も稀である。之れに反して零碎の時間を利用して、大事業を成し遂げた人は澤山ある。毎日珈琲を沸す間の十分間を利用した「ロングフェロー」は、終に「インフェルノ」の翻譯を大成したのである。實に零碎なりと雖も時間は黄金に優るものである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月十五日

艱難は最善の良師なり。

(古諺)

果樹の枝は延び次第、葉は繁茂次第に放任して置けば、花も佳からず、實も多きは結ばぬものである。されば花を佳くし、實を多く結ばせんとせば、處々の枝を伐り、葉を除かねばならぬ。麥の生長を良くする爲めには、脚で踏んで歩くではないか。棒で打つも亦一方法である、斯くの如き人爲的の災害は、これぞ花實を増收する所以である。艱苦は最善の良師である。



四月十六日

一忍以て百勇を支ふべく、一静以て百動を制すべし。

(蘇老泉)

眼前に現はれ來つた障礙を取除かねばならぬと云ふが如き場合、に於て、我に膽勇なれば毫も驚かず、之れを處して些の騒ぎ動する所なく、泰然自若として綽々處理するか、或は直ちに快刀亂麻を断つ如くに除去し得るのである。されば膽勇も平素より修養して功を積み、咄嗟の出來事にも動せずして充分の威力を發揮し、其の眞價を現示すべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月十七日

大事を裁断するは唯偉大なる心のみ。

(セネク)

偉大なる心は性急にして齷齪たる者の有する所でない。必ずや綽々たる餘裕のある者の有する所である。

偉大なる心、即ち餘裕を生むに外ならぬ。而して大事を擔當するは餘裕なきもの、能はざる所である。



四月十八日

忍耐は運命に勝つ。

(カムベル)

英國の理學者「ヨンゲ」或る時、友人に騎馬を勧めらる、元來馬に乗りたる事なけれど、性質堅忍の「ヨンゲ」は、乗れぬと云ふを恥と心得、乗つて乗れざる事なかるべきと、同乗したのである。友人は、馬を馳せ高き障礙物を乗り越えたるを見て、ヨングも倣ひたれども忽ち落馬したのであるが。二度、三度、繰返し居る間に、首尾能く之を乗り越えて、無事に進んだのであった。此の勇氣と、忍耐と、堅き心とありてこそ、何事にも勝ち得たのであらう。實に忍耐は運命に克つ場合多くして、凡人も偉人の域に達することが出来るのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月十九日

平氣の平左衛門

(日本俗諺)

平生用意あることを得るの人は、沈着平氣の人である。平氣の平左衛門である。吾人は果して斯くの如き工夫を要とせずや見よ、人生は海洋の如しである。險波狂瀾、何時難破を吾人に與ふるも知ることが出来ないものであるから、此の時に處して、能く生命を全くし得べき者は、唯沈着平氣の工夫があるのみである。平氣の平左衛門たる工夫は、消極的なる現代には最も必要なる清良劑であると信ず。



四月二十日

實例は原理を心に銘せしむ。(ピーコンスファイルド) 或る人、乃木大將在世の折、著書の序文を乞ふたけれども、諾されざれば、その手紙を費ひ、そのまゝ版にして、序文にかへて出版せしに、其の文言中に「理屈も議論もなく云々」の語があつた。然るに「理屈」の屈は「窟」であることに氣付きたる某人、再び大將に後世に傳ふるものなれば、願はくば今一度書き直して給はれと頼んだのであつたが、大將は、事もなげに「さればこそ、理屈も議論もなくお断り申したのである」と、洒然として、再び書かなかつたとの事である、其の潤達の裡に、獨りを慎み、自ら守るの堅きは、實に古武士の俤の躍如たるものあるを覺ゆ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月二十一日

言に訥にして、行ひの敏ならんことを欲す。

(孔子)

口達者な者は、一時は一寸うまく行くこともあらうが、然し其の時其の場限り丈のことである、最後の勝利は言の訥なる、行ひの敏なる人の手に歸するのである。されば言葉多きは實少き俚諺の如く、人は精々言語を慎むべきである。言語を慎むば是れ其の行爲の改善を意味するものである。



四月二十二日

禮は其の奢らむよりは寧ろ儉なれ。

(論語)

禮のもととは心である。されば徒らに儀式をはなやかにして禮を厚うしたと思ふは、却つて大なる考へ違ひである。要は謙讓にして義節を盡せば足るのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月二十三日

金は浮世の廻りもの。

(日本俚諺)

貧すればとて苦に病むに及ばぬ。貧乏あればこそ金持もある
金持あればこそ貧乏人も勵み、貧乏あれば金持も警む。警まね
ば金持が貧乏人になり、勵めば貧乏人が金持になる。誰れやら
の歌に「櫻散る隣にいとふ春風も、花なき宿ぞしたしかりける」
とある如く、金持の金の散り行く先きは金持の庭ばかりはでな
い。



四月二十四日

物言へば唇寒し秋の風。

(芭蕉)

突角、人は黙つてさへ居れば事はないのであるが、然し言説
の愈々盛なる現代、無言のみにては到底、世に處することは出
来ぬは勿論であるが故に「言ふべくして言ひ、言ふべからずし
て言はず」之れ中庸の道である。然れども、時としては、ラム
プラーの「沈黙したる爲めに悔ゆる者は少し」と言つた通り、
言ふは言はぬに優る場合がないではない。又、駟も舌に及ばず
との古諺もあることなれば、一度口外した言葉は元へは返らん
のであるから、其の發する時に於てこそ不斷の熟慮を要するの
である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月二十五日

勢を以て交る者は、勢傾けば則ち絶ち。利を以て交る者は、利窮れば則ち敗る。

(文中子)

權勢家なるが故に交り、利得あるが故に交る者は、其の人と交るに非ずして、之れ其の權勢と交はるものである。されば一朝にして、勢衰へ、利の盡きたる時ありとせば其の時は交りは敗れて断絶するものである。現代に斯かる人の多きは痛心に堪えざる事である。



四月二十六日

來年はくとして暮れにける。

(古句)

汽笛一聲、夢を載せて千里を走る世の中、漸く乗りは乗つたれども、室内は思ひ及ばぬ満員を々の爲めに、坐するに席なき爲め、失望せるものあり爲ざるもありて辛くも前途の希望を繋ぐものもある。次ぎの驛にてこそは、此の次ぎこそはと、居た甲斐あつて、漸く客も減つて、ヤレ嬉しやと腰を掛けんと思はば早くも下車をせねばならぬと同一に、來年は、來年はと辛抱漸くにして、漸く樂になつたと思ふと此の浮世を去らねばならぬ人となり終るのである。されども、一生を通じて乗替、乗替と氣移りをして樂にもならず終に再び起つ能はざる人となるよりは稍々可とすべしである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月二十七日

悪を爲して人の知るを畏る、は、悪中なほ善路あり、善を爲して人の知るを急にすは、善處則ちこれ悪招なり。

(菜根譚)

人の見る前ではばかり働く風を見せて、忠勤者と思はしむる様に爲すは浅はかなる心である。陰日向なく、人の居る時も、居らざる時も、忠實に働く者は、必ず後日大に名を成する人である。語は短なりと雖も、以て軌と爲すべし。



四月二十八日

立身成功の秘訣は志を堅くするにあり。

(アスレリー)

氣の小さき人は、餘り毀譽褒貶を氣にするが故に、思ひ切つて大事をなすことが出来ぬものである。人が褒めやうが、そしらうが、誤解しやうが、そんな事には頓着なく、唯我が信ずる處を貫徹せしむるが丈夫の氣である。志を堅固に持するは等しく成功の一步である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

四月二十九日

智識なき智識は瞞着に過ぎず。

(ベン、ジョンソン)

吾人は修身處世上、先づ智を修養せねばならぬは暇々を要せぬ事ながら、若し、智の修養を怠りたる時は、種々なる弊害を生ずるものである。のみならず、天賦の能力を失ひ、終には人生の運命を叫び、呪ひ、何等努力することなく、全く靈性を有する人類たるの資質を欠くに至るのである。所謂、生き甲斐のなき人間と成り終るのである。



四月三十日

事を議するには、身、事外に在りて、宜しく利害の情を悉すべし、事に任ずるには、身、事中に居りて、當に利害の慮を忘るべし。

(洪自誠)

事業を始むる以前には、長者の意見を聞き、熟考に熟考を重ねざるべからず、而して一度事を創めたる以上には、他を見向きもせず、顧慮する處なく、全力を傾注して其の事業の成功を期すべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

五月一日

最大事は小事の助を假りて成る。

(英國俚諺)

ハーバート大學教授たりしハーバー氏は、常に細事に就きても深き注意を拂ふ性格の人であつたが、或る日ワリニダット島の附近の湖畔が天然の松脂を以て掩はるとことを想見し、此地よりして必ずや多量の松脂を産出し得べきことを信じ、英國政府に上申して四十三年間を通じてワリニダット島の松脂專賣取得權を獲得するに至りたりしが、氏は一小事に因つて無限の富を作り、他の同輩をして顔色なからしめたるは、之れも小事の助を假りて最大事を成し遂げたる適例である。



五月二日

念力岩をも徹す。

(日本俚諺)

機會到來と見れば直ちに之を捉ふべきであるが、一步を進めて考へれば機會の到るを待つよりも自ら進んで機會を作り出す覺悟がなければならぬ、而して自ら機會を作らんとすれば人心をして自然にその問題の方向に向け、期せずして機會の到來する如く、働かねばならぬ、これが即ち機會を作り成す、と云ふ事で、念力岩をも徹さなければ止まざるの覺悟こそ、事業を爲すにも、事功を樹つるにも忘るべからざる要件である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

五月三日

時遇へば鼠も虎となる。

(古諺)

世間にはよく貧乏をこぼす人あり、四百四病の中、貧程つらい病は無い、と云ふことがあるから、成る程、辛いには相違ないのであらう、貧乏するより金持ちたるを望むは、これ萬人の人情として争はれない事情である、然れども、清貧の濁富にまさる萬事々たるは、今最云ふまでもなく、よしや赤貧洗ふが如かるも、運命ならば止むを得まい。運命ならば昨日まで貧民窟にしがなき生活を営み兼ねるの人も、今日は忽ち、これはと驚ろき呆る、ほどの世出榮達をせずとも限られず要は只、如何なる逆境に在りとも、天命のまゝ、時の到るを待ちて、生を樂しんで自暴自棄せざるにあるのである。



五月四日

虫の居所

(日本俚諺)

能く人が、彼の時は彼んな事を云はなくてもよかつたのにツヒ虫の居所が悪かつた爲めに言ひ過して取り返しが付かぬ。ジツと我慢して居たならば濟む事を、ムラ／＼とした爲めに飛んでもない不都合を仕出來して残念である。と云ふ様な言葉を、平素往々聞く處である。所が流石は主人、親等の目上の人々に對しては滅多に起らないが、目下の者には盛に振舞ふものであるけれども、時には此の虫の居所が常に悪く、習慣性の短慮を

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

發揮して、唯自身の思ふ存分に徹さうと云ふ様になつては、既に常軌を脱したものと云ふべきである。然しながら、お互に多くの場合に起るのは、何でもないことが癢に觸つたり、詰らぬ事が氣に入らなかつたり、所謂虫の居所の悪い爲めに發すのであるが、其の爲めに遂に大なる失策を招く事がある、されば吾人は忍耐の二字を忘るゝ事なく、「虫の居所」をして常に善からしめ、自ら失策を招く如き愚を學ばざる様心掛くべきである。



五月五日

人を鏡とせよ。

(日本俚諺)

人の心は昇ては聖賢と等しかるべく、降つては兇賊惡漢と何の差なきに至るものなれば、人の善を見ては倣はんことを思ひ人の惡を見ては自ら戒め、以て修養の資料としたならば善惡吉兇我が心を養ふに足るは勿論である。

了然の歌に

今ぞ知る世々を心に照らしつゝ、

人をかゝみと云ひしまことを

とあるは、則ちこれを謳ふたのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

五月六日

断じて之れを爲せば鬼神も之を避く。

(羽倉簡堂)

今日は曇る今日は雨降ると、不平を並べても空は晴れぬ、
雨が降るなら傘一本で我が行動は定まる、事に當り、くよくよ
吐きて我が望の叶ふものなら、人生は寝惚奴の現に過ぎぬ。事
を決するに断行である。断じて行へば鬼神も避けるなり。



五月七日

流れては海となるべき溪水も

しばし木の葉の下くゝるなり。(道歌)

一朝一夕に成るものは一朝一夕に敗る、立身も氣長に根底堅
きは永續す、長年月の間には自ら練習も積み、一時の失敗に落
膽せず一時の成功に誇らず、溜々として流る、大河の如くなる
べしである。

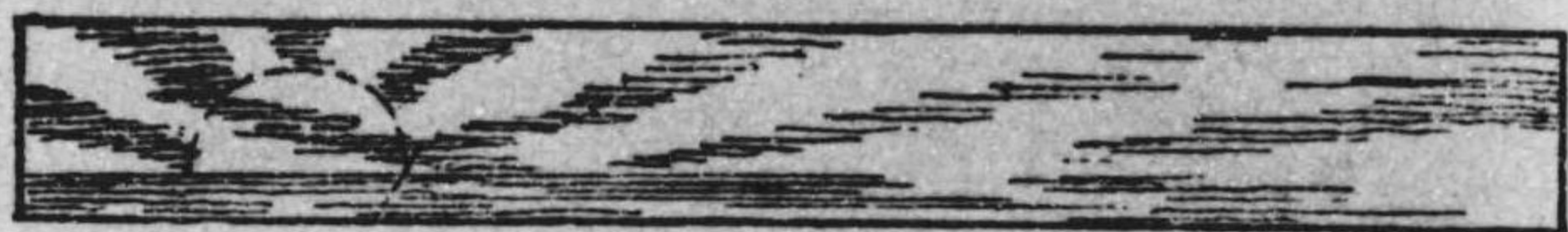
五月八日

天性と職業と相符合する者は幸福なり。(ペーコン)
一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

職業選定の當否が、自己の成功を奏し、自己の運命を開拓し
自己に取りて最良の機会を捉ふるに對し、殆んど死活の權を有
することは具眼者を待たずとも、心ある人々の容易に看取すべ
き所であつて、此の一事にして失敗したとするなれば、如何に
自己の身命を賭して努力惡戰をなすにせよ、又如何に自己の精
力を傾注して奮闘盡瘁を怠らざるにせよ、宛然大空に向つて自
己の強拳を揮ふに同じく、歸する所は自己の徒勞に終らなければ、
自己の失敗、失望、失策、誤謬を演ずるに外ならざる結果
を見るに至るのである。



五月九日

住めば都

(日本俚諺)

都會の地に非ざれば娛樂なしと斷ずるは多くは都會人の解釋
なり、將た都會化したるハイカラ百姓の考へなり、純粹の農民
は住めば都の快感を各々其の山村僻地に有して之を離るゝの
情なし、故に地方青年諸士に望む諸子の娛樂たる自然の間に在
ることを忘るゝ勿れ、山水の勝を娛み、泉石の奇を愛し之を文
にし、之を詩にし、俳吟の社を組むべし、探勝の行を爲すべし
自然科學の研究こそ山間農民獨持の權利なるを誇らば、地方農
村豈娛樂なしとせんやである。都市の富豪邸宅にも假山を築き
花木を植ゆるに非ずや、是れ都市の人々が絃歌の娛樂は以て其
一日一訓を守れ



一日一訓を守れ
 の心情を満足せしむるに足らず、都市を農村化せんとの希望を
 満せるものとす。故に農村に娛樂なしとせば、都會にも亦之れ
 無しとせざるを得ざるに至る。

五月十日

時務を知るは俊傑に在り。

(古 諺)

俊傑は如何にして時務を知る歟、克く時勢の中心を捕ゆれば
 なり。青年も時代に後れては年若き老人となり、時勢の落伍者
 となるものなれば、克く世界人文の颶風を調査し常に其の中心
 點を知るの覺悟なければならぬのである。



五月十一日

小事には分別せよ。

(水戸光圀)

單位の觀念、精神がなければ凡ての人は産を増殖することは
 出来ぬ、この一事さへ了解し得るならば、勤儉力行などを説く
 要はないのである。この一事が心に刻することが出来たとする
 ならば、書籍を見ても有益に利用し、無駄話をして居る間に
 紙捻を捻る。話をすれば馬鹿な下らぬ話をしてならぬ。と氣が
 付く、己を一人大切にする量見があれば決して其の人は間違ひ
 ないのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

五月十二日

艱苦の時は、善人の爲に燦然たる機會なり。(ホーン)

地質學者として有名なるもの世に多しと雖もウイリアム、ス

ミスの如きは實に其の最も雄なるものであらう。

彼は貧しい農夫の子であるが、如何によして學才を磨いて地

質學者とならんと志し、先づ測量技手となりて專念各地の土地

山嶽の地質を研究し、年僅に二十三歳にして、完全なる地層地

圖を作らんと企てた。

其の刻苦精勵は彼の學才をして益々大ならしめ、幾許もなく

五里十里の遠方より山を臨みて其の地質脈絡を審に知るを得

るに至つた。之れ即ち彼の爲めに刻苦は實に燦然たる機會であ



つたのである。

五月十三日

心を足心に納めよ。

(釋迦)

三十貫の體量を有する相撲取にも人間として軽い人物あり、

五尺の小男にも重々しき人格を有する者もある。

人に重い人と軽い人とあるは貫目の如何にあらずして實は人

格の如何に因つて定まるものである。されば軽い人と成る勿れ

重々敷人物たらんことを期せ。人は如何に修養せば重き人物た

ることを得べきか、先づ足に力を入れ、頭を軽くするのである

不倒翁の如くに重みを腰下に取りて歩行するにもドシ／＼と脚

一日一訓を守れ



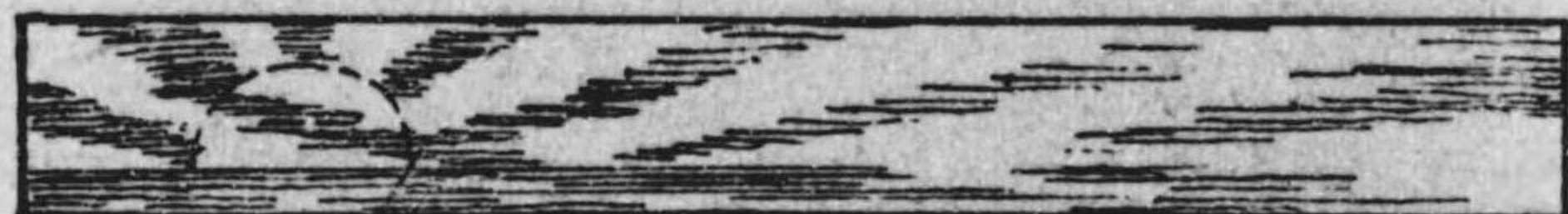
一日一訓を守れ

を重く取ると外観にも重さうな人物と見ゆるものである。軽い人は脚を軽くして歩行するにもチヨコ〜走りをする、故に軽さうな人と見ゆるものにして、女子ならばまだしも、男子として甚だ醜い、宜しくツツシリとしたる重みを足に備へて威風堂の丈夫となるべし。沈着の性行も足の重みより来り、綿密の思想も下腹の空しからざるより生ずる者と知るべしである。

五月十四日

(プレト)

克己は勝利の最大なるものなり。人の立身出世は其の周囲を作ると否らざるとにある。木下藤吉が始めて織田信長に謁見するや、信長は藤吉を汝の面は猿に



似たりとて之を侮辱したのである。尋常の青年であつたならば信長の言に怒りて怫然として其の前を去るべかりしに有繋は藤吉なり、ジツと耐へて怒らずに、平然として信長に臣事せんことを乞ふたのである。藤吉が立身出世は實に此の克己忍耐の心にあつたのである。藤吉は此時に於て已に先輩織田信長を自家の味方に取り入れ、其の勢力範圍の物としたのである。青年は其立身出世に斯の如き自家の地盤を造る必要があるのである。

五月十五日

馬子にも衣裳。

(日本俚諺)

賣物には花と云ふことあり、青年も一つの賣物であるから、一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

花を飾るの必要がないでもない、人に依りては内心さへ正しければ外形はドウでも宜しとて、青年を指導するにも形式の上には頓着せざるの流義あるが、世故に通せざるの見識と云はねばならぬ。さりとて、身成りに注意せよとは、決して輕薄才子氣取りを奨むるものでない、要は青年は青年らしく、活潑にして衣巾は端正にして小薩張りとしたる風體を作るは人に好かれ立身の門内に入り易き秘訣と知るべきである。

五月十六日

能ある鷹は爪を隠す。

(日本俚諺)

リンコルンがまだ代議士たる時、議會に出席せんと道を急い



で行く中に、路傍の或家で、少女の泣聲が聞えた、如何した事かと問へば、家族の者は、それ／＼荷物を持つて先へ行つて居るので、後に大荷物が一箇残つて居る、娘は後に残つて、人足の来るのを待つて居るが、汽車の出發の時が切迫して居るのに未だ來らず、大荷物は元より少女の手には合はず、如何にせんと泣いて居ると答へた、リンコルンは直ちに其大荷物を肩にし少女を急がして停車場に行つて見れば、家族の者も、少女の來るのを待つて居る所であつて、大に喜んだが其荷物を運んでくれた擔夫はと見れば、誰あらう當時名高き代議士であつたので喜ぶやら、有難いやら。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

五月十七日

己を盡して成るを待つ。

(格言)

此の語義は何時如何なる人と雖も心得て居なければならぬ、自己のあらゆる限りの力を出して事に當る、一旦一事に取りか、つたが後最、それを一生懸命でやる。殫れて後休むの覺悟を以て事をなし、而して事業の成功を待つて居るのである、決して事の成るを殊更に急ぐ必要もなければ、又別種の方略をめぐらす必要もないものである。

一事業に自己の力を有らん限りを出して劣めて其れで成らなかつたならば、其れまで、ある。唯自己の力限りを出したと云



ふ處に何物にもまさる尊さはある。其れ丈盡して置けば事の成否は問はず、自己の任務は終へたのである。若しそれが不成功に終るとも心に何の残り惜しい點はない筈である。斯くてこそ天は其の人に寶冠を下すのである。

五月十八日

天行健、君子以自疆不息。

(易經)

天の行くこと一日數千萬里、年々歳々變はることがない。是れ其の健なる所以である。又天は剛なるものである。故に支那

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

に於ては古來男子の徳を形容して剛健と云ふ。西洋に於ては徳
即ちバーチユールと云ふ、字は男即ちグヰルと云ふことであつ
て、男らしきと云ふことが即ち徳の意味である。西洋諸國と雖
も男らしきことを要求するは斯くの如きものがある。周易に於
ては剛健に對して柔順と云ふことがある、柔順は即ち柔にして
且つ順なるものである。剛健は天の性、柔順は地の性である。
男子は須らく剛健にして輕薄を避くべきである。輕薄にして意
志が確實でないときには遂に不成功に終つて了ふのであること
を忘れてはならぬ。



五月十九日

虚榮の行き止りは重き石を荷負ふに異ならず。

(英國格言)

虚飾は男子として最も慎む可きである。精神を費やすことの
大なるものあればなり。虚飾の爲めに精神を費やせば根本の力
が殺される。根本の力が殺され、ば努力が觀念薄らぎ、終には
成功しなくなる。されば古來の大人物を見るのに皆質朴を以て
最大の要素として居る。質朴なる者は大に發展する質朴ならざ
る者は發展する事なく遂には落伍者となりて彷徨するに至る。

五月二十日

人間に兎角己れを非難するに猶豫し、佳報は寢て待つべき

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

ものと考へ、佳報来らざれば罪を運命に歸するの癖あり。

(フリスウエル)

世の中には、最初幸運に乗じて幾十幾百萬の金持となつた者が、或は其運に乘じ過ぎ或は天魔に魅られて、忽ち損失を招いた時、人に向つて愚痴の百萬遍も繰返し、甚だしきは狂氣したり、落膽の餘り病死するものがあるが、浮世の風の吹き廻しで一時間金銀財寶を身に纏ふやうに爲つても、本年裸體一貫の人間一朝逆運に囚はれて元の空阿彌と爲る事があるのは更に不思議でも何でも無い、運命を自覺する程の人は自ら諦めやうがある筈であります、惜しい、欲しいと云ふ念に驅られて初めに得たのを不思議と思はず、後に失つたのを不自然に感ずるのは人間



の弱點と申しながら畢竟修養の足らぬのである。故に盛衰消長ある世に身を委ぬる者は、能く其の間の機微を察し、能く覺悟して死兒の齡を算ふるが如き愚に陥らぬ質素を修めねばならぬのである。

五月二十一日

流に従つて泳げ。

(英國俚諺)

氣轉は商賣上とんな効果を齎すかと云ふに、その働きが實に靈妙不可思議である。例へばこゝに同じ資本、同じ智識を持つて居る者が二人商賣を始めたとして、一人はどん／＼出世し、一人は何時までも平凡である、さう云ふ風な例はよくあるのだ

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

が、その原因は何であるかと云ふに、此の二人の間に氣轉の利くと利かぬとの差異があつたに外ならない。
正直に、勤勉に働くと云ふことは商賣繁昌、身立成功の基ではあるが、それと同時に、それ以上に氣轉を利かせると云ふことが、商賣人の最も必要なる立身策の一つになるのである。流に從つて泳ぐは彼岸に達する最善の一路である。

五月二十二日

人の風を見て我が風を直せ。

(日本俚諺)

男子は成可く沈勇なるべし。一事件が起つても直ちに動ずる様なことがあつては面白くない。其の事件の真相を確めて事に



應ずる策を立つべきである。不斷より之れに慣れて居ると云ふと自ら其の習慣も出来る、此種の研究をして居らぬと云ふと其の場に至つて困難することがある。心を静にして自己の知つて居る範圍に就いて之れを考へて見よ。物事に對して餘り躁狂なる者もあるであらふが、之れ等を何と感ずるか、恐らくは面白くは感じないであらう。又世の中には沈勇と云はれるやうな者もあらう。之れは如何に感ずるか。心には自分でも斯くの如くありたしと思ふであらふ、人の風を見て我が風を直せとは蓋し茲である。吾人は此點に於て最も努むべきである。

五月二十三日

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

衣布の王。

(史記)

金剛石の一箇の價値は大なるものになると、數百萬圓だと云ふことであるが、是れとてもなくなつて了ふことがある。磨滅することがある。併しながら、人間の玉だけは何十萬年を経過してもなくなると云ふ虞はなく、年を経るに隨つて彌々益々顯はれるばかりである。されば人間の玉は最も大切にすべきものである。最善を期すべきは即ち布衣の王たらんとするの一事なのである。

五月二十四日

人の道は心にあり。人の心は行にあり。(新井白蛾)



人生は定まれる運命に依つて、支配せらるゝものであると説く運命論者にしても、人間自らが毫も動く所がなくては、善悪運命吉凶、孰れにも逢着することが出来ぬと云ふことは否定し能はざる所であらふ。されば必ず多少は動くに違ひない。その動くのは即ち精神身體の働くのであつて、精神身體にして働けば、必ず其の間には多少の學問もするし、經驗も得るし、又觀察をもするに相違ない。斯くて智識の修養は、自然に行はれて其の實行に伴ひ、それが社會の道德とも關係をして、善惡正邪どちらかに分たれるに相違ない。それとても廣き意味より云へば、修養に外ならぬのである。けれども眞の所謂修養なる者はそんな不全完にして不十分なるものではなく、必ずや吾人の智

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ
 情意を完全に發達せしむる所の要素を、充分に備ふるものでなければならぬのである。

五月二十六日

理想は爾の衷にあり妨碍も亦爾の衷にあり。(カーライル)
 吾人の行ふ所は、善惡共に心より出るのであるから、常に徳性を涵養することを勉めて、誠意正心ならしむることを期すべきである。之は多くは良心の指導する所に従つて、善良なる方向に進み得るものであるから、よく内外の惑誘を却けて、公正なる道を歩むやうにするのである。これ即ち、智能を啓發し徳器を成就する必要がある所以であつて、而も之を實踐躬行する爲



には眷々服膺して咸其徳を一にする所の實行力をも養成せねばならぬ所以である。

五月二十七日

玉琢かざれば器を成さず、人學ばざれば道を知らず。
 (日本俚諺)

長くも照憲皇太后は、
 「金剛石も磨かすば 玉の光りはそはざらん
 人も學びて後にこそ まことの徳はあらはるれ」
 の歌を詠ませ給ふて、學問の要を示させ給ふたのである。畢竟するに、學はマナビなり、學ぶは真似るなりと云つて、先人の經驗し發明したことを、後人が繰返して真似ると云ふに外はな

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

いのであるからして、教師は先人の發明し經驗せる所を生徒に傳へ、生徒は又之を覺えて、世用に供し、又後人に傳へ、子女に授くるに過ぎないのである。斯くして良好の結果を得れば、學の要は足りて居るのである。

五月二十八日

學は讀書の謂ならざるも、然も書を讀まざれば、以て學の方を知ることなし。

(朱子)

抑も學問するのは何の爲であるかと云へば、身を修め世に處し、立身出世をせん爲なるは言ふまでもない事であり、然るに學問するのは、漫に讀書して、其の知り得たる所を徒に



他人に誇らん爲であると心得る淺見の徒輩が多かつたり、或は又一概に讀書すると云つて、其の精神上に害毒を與ふる所の不正の書物や淫猥な冊子を読み、毫も書籍の選擇をせぬ所より、終には讀書學問の爲めに、反つて一生を誤まる基となるからである。斯くてぞ學問するの要なしとて、終に絶対に之を不用視せらるゝに至つたものである。けれども、之は抑々學問の要を知らず、又學問をする爲に其の志が立たぬ所の過去に基いて居るのである。決して學問書物其物の罪ではないのである。

五月二十九日

不屈の精神を以てせば、何物か我が前路を遮らん。

(ダニエル)

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

豊公、小田原陣の時に奥州會津の勇將蒲生氏郷は自ら三階笠の馬標を作り之を用ひんとしたのであるが、それは驍將佐々成政の用ひた所であつたから、秀吉は許さなかつた。然るに氏郷は内心大に憤り、さらば用しぞあれとて、獨斷にて其の旗を作り、畫工をして肖像を畫かしめ、之を乳母に托して菩提院に收むべを以てし、大に奮戦して北條氏の軍を破り、遂に秀吉の許す所となつたので、氏郷の決死的勇氣は當時有名なものであつた。吾人は彼が進取的勇氣を學ぶべきを囑々するのである。

五月三十日

己れを知るは眞の進歩なり。(ハンス、アンダーゼン)



各自の力は、自己を知るより大なるはないのである。自己を知るとは種々なる方面に於て自己を観察し、了解するの意にして、自己の存在を知り、長所、短所、責任、地位、過去、現在、將來等凡ての方面より自己を知り得たらむには、必ず偉大なる力は勃然として起るのである。自己を解する全きに於て得たる力は眞の力である。全力である。されば世事百般に對し、難苦窮乏に或は障礙蹉跌に遭遇することありと雖も必ず、毎に優勝者たるを得て終に名を成し功を收むる事を得べきは明である。

五月三十一日

吾人の性格中、最も重要なものは、確固不動の決心なり
一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

と知るべし。

(ルーズベルト)

吾人の進路は唯一つである。吾人は一道の光明を直線に辿らば即ち足るのである。其の之れに依つて人を動かすと否とは、吾人が敢て關する所にあらざるものにて、苟も吾人の進路を傍観して、嗤ふものあらむか、自由に嗤ふべし、感ずるものあらむか自由に感ずべし、動く動かざるとは抑も人のことに屬するものにして、吾人にして若し、餘りに多く傍觀者の無責任なる批評に頓着せば、吾人は吾人が進路を脱却して、遂に人の爲めに進退の自由を殺がるゝに至るものである。されば吾人は自己の進路に勇往邁進して自己の全力を發揮して敵壘を屠り得れば足るのである。



六月一日

君を要する者は、上を無するなり、聖人を誹る者は、法を無するなり、孝を誹る者は、親を無するなり、此れ大亂の道なり。

(子 經)

一體我が國は忠孝と云ふことを以て經緯として織り出した國柄であつて、此の忠孝と云ふことは支那でも云ふが、我が國のやうな忠孝は世界に又と類の無いものである。支那では成程孝と云ふことに就いては、昔しから随分やかましく云ふたので、夫の孔子の説かれた孝經も有るほどのことであるが、忠と云ふことになる。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

三度諫めて聴かざれば去る。

と云ふて諫言が用ひられなければ直ぐさま其處を去つて他人となるのが支那の君に對する道である。

然るに我國ではさうはいかぬ、何故ならば支那の天子は先づ力が強くて徳のある人がなるのであるから、丁度親方のやうなものである。それ故に用ひられなければ暇を貰ふより外は無に分れて了つて他人となれば文句は無いのであるが、我が日本では恐れながら上天子様と吾々七千萬の人民とは、元來親子の間柄であるに依つて、親は何處までも親、子は何處までも子で、勘當しても親は親であり、勘當されても子は子である。そこで日本の君臣は分れやうもなければ暇の乞ひやうもない。それで



あるから我國に於ては古來忠孝不岐と云ひ、忠と孝とは一つもので、生みの父母に事へると同様で心持で皇室を戴いて行くのが、即ち我が國の忠である。

要するに、世萬一系の皇統を戴く我が國の臣民と生れたることを、寝ても覺ても忘れぬやうにせんければならぬのである。

六月二日

忍耐は最も重要な品性の一なり。而して必ずその報酬を持ち來るべし。之れに反して、短氣は吾人に損害を與へん

(マーシャル)

豊臣太閤の家來で加藤清正や片桐且元などと共に名高い夫の一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

福島正則と云ふ人は、賤ヶ嶽の七本槍、或は朝鮮の役等に勇猛なる戦功を顯はした大將であるが、太閤の没後は意を決して徳川に随つたほどであるから、世の形勢を観る智慧もあつたに相違ない。然しながら惜しいことに此の人は、天性非常に我見の強い人であつたから、一時の考で前後見ずにやり出すことが多かつた。これはお互ひも能くあることで、獨り正則に限つたことではないが、果は遂に身を亡ぼすに至つたとは恐るべきである。

六月三日

内に省みて疾しからずんば、それ何をか憂へ何をか懼れん。

(孔子)



内に省みて何等の不安なかしむるには、先づ第一に、己、己と威張る奴、これを柝伏することが肝要である。然らば其の己とは何であるか、五尺の體、五十年の命、斯う昔から相場の定つて居る己れである。そんな果敢ない己れを頼みにして、之れは己れの家だ、己れの藏だ、己れの財産だ、己れの土地だ、權利だ義務だと争つて見たところが、火事や洪水ならば未だしもの事、いよく此の世の化縁が盡きたと云ふ斷末魔になつて、家だ藏だ土地だ財産だと、何時までも執着いて居る譯にゆくものではない。唯己れに随つて行くものは善惡の業報のみで、これだけは何慮までも、何時までも附いて廻るのである、して見れば少しでも善業を積んで惡業を送らぬやう、せめて一生涯

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

の道中僅づ、でも罪障の荷を軽くして、寝るも起きるも食ふも着るも、よし不足不自由はあつても、内に省みて少しも疾しい所のない安心を得て、人の人たる本分を盡したいものである。

六月四日

天壽を全ふするは、人の本分を盡すものなり。

(福澤諭吉)

凡ての人の生れつきたる天命は、多くは長し、天命の短かくして生れたる人は稀れである、生來元氣盛んにして身體のよき人も、養生の術を知らずして、朝夕元氣を損い、日夜精力を減せば、天性の年月を保たずして、早世する人多し、又天性は甚



だ虚弱にして多病なれども、其の多病なるが故に慎み怖れて保養怠らざれば却つて、長生する人は是れ亦世に多いのである。此の二つのものは世間眼前に多く見る所なれば、疑ふべからず、慾を恣いまゝにして身を失ふは、例へば力を以て殺自すると同じく、早きと遅きとの別はあれども、其の身を害するのは同一である、益軒先生の説かれた。實に其の言の如く、世の人々は酒に耽り、色を漁り、情慾を恣にするが爲めに、身體を傷害し、天壽を全ふし得ざる如きは、則ち人の本分を盡し能はざるものにして、何たる愚の行爲ぞ、諸士、青年は此の愚を征服せしめ以て天壽を保ち息災延命たらざる可からず。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

六月五日

色の白きは七難隠す。

(日本俚諺)

よく昔から、女に就いて此の言葉を申して、鼻が少しは低くとき口が大きくとも、色が白ければ美人とする、是れと同じ様に容貌は少し醜くとも、心の美なるによりて美人と謂ふこと出来ぬ。私が若い娘を見で、あ、美しいと思ふ時もあるが、あ、厭だと思ふ時もある。同じお茶を出されるにもツンとして出したり、厭々出されるのと、心から深切に禮儀を重んじて出されるとは能く解る。たとへ親切を造つた者でも、肝要な心の親切でなければ何にもならぬのである。實に心の鏡は靈妙なる



のである。誠意のある者ならば、悉く形の上には現はれて來るのである。加之もこの誠の心は天地神明にも通するのである。

六月六日

さしのぼる朝日の如くさわやかに

持たまほしきは心なりけり。(明治天皇御製)

旭の如き清淨き光の心を以て成さば、何事でも成就するものである。希望が達し得るのである。此の人々の具へて居る心の光を以て、世の中を照して行くのである。世の中には暗い方には此の光を味まして居る人が澤山ある。暗い方のみならず明るい方にも却々あるものである。されば悪鬼の如き汚れた心は、

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

如何なる文明國でも常に満たされて居る。況んや野蠻國には尙更のことである。併し乍らこの心の光は如何なる人にも具はつて居るものであること丈は自覺せねばならぬのである。

六月七日

遅くとも春は來にけり牛の年。

(古句)

如何に才があらうが頓智があらうが、誠實を欠いては何にも成らぬのである。若し外交官でもあれば權謀術策と云ふこともあるが、此れとても誠心を欠いては永久的の術策にはならぬのである。誠の心正直な人に成功がある。成功の秘訣は皆正直が根本である。濡れ手で粟を掴み、棚から牡丹餅を受けるが如く



思ふたからとして何の所詮も無い。此頃は株式で何萬儲けたと言つて居る成金が、一夜の間に何萬と云ふ負債をして、今までは大盡風を吹かして居たのが急に身の置場に窮したと云ふこともある。遅い様で早いのが牛であり、疾い様で遅いのが馬である。前提の古句、遅くとも春は來にけり牛の年、斯う云ふ風にやれば順序よく知らずくの間に立身出世をするのである。

六月八日

人生處世上の天則是、奮闘と力行なり。(シロセ)

吾々人間は抑も何處から生れて來て、現在如何なる意味ある仕事をして居るか、そして壽命が盡きたらどうなるかと云ふ事一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

を考へなければ、人生の意味は徹底しない。併し之は人生の大問題であつて、到底筆舌を以て究明すべからざる事であるが兎に角人間が此世へ生れたのはどう云ふ意味であらうか、多くの人は利益幸福を求める爲めであると云ふが、成程夫れも一應尤もの事ではある。併し幸福を求め利益を追ふばかりで、それで人生の事足れりと云ふ事は出来ぬ。勿論人間の生活上衣食住の之は最も必要なものである、換言すれば生活を段々高めて行かうと云ふのは人情である。けれども生活の爲めに働いて居る者は單に人間ばかりではない。動物にも此の慾望がある、植物にも生長の慾望がある。人間が生れて来て、唯だ利益幸福を求めると云ふばかりでは凡ての生物と何の變つた事がない。夫を



考へねばならぬのである。畢竟、人生處生上の天則は、奮闘と力行にして、水の滴、微なりと雖も漸く大器に満つるが如く、又雨滴の石を穿つが如く何事か成就せぬ者があらうぞ。

六月九日

準備せずに事を初むるは、舵なくして舟を太洋に出すに等し。

(古 諺)

青年の時は其の心志の浮動するが爲めに、念を推すの必要あるものも念を推さずして後日に悔を貽すことがある。言語を慎まざる爲に言行の不一致を來して信を失ふことがある。小利にだも切々たるが如くして、而も小賣を吝まざるが故に收支相償

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

はざるに至ることがある、是皆小事を忽せにするが爲である。失敗勝なるも之れが爲めである、先輩に輕侮せらるゝも之が爲めである。大なる希望に到達せんとせば大なる準備を要す。航運の妙は蓋し操舵の如何に因る又多大である。

六月十日

若し事の成就せんことを望まば、自ら任じて之れを爲すべし。若し事の成就せんことを望まざれば、他人に吩咐すべし。
(スマイルス)

天地の大、宇宙の廣、功名富貴を致すの道は一にして止まらず、政治家としても、軍人としても學者としても、發明家とし



ても、美術家としても商人としても職人としても、日傭取としても亦其他あらゆる業務に於ても、功名富貴を博取することを得るに異なることなし、勿論其功名富貴に大小の相違あるを免かれないのである。然れども其大小の相違は熱誠の厚薄と智識の大小との相違より來るものにして決して其業務の相違に依るに非ざることを記臆せよ、曾て一子の爲めに職業の選擇を某紳士に乞へる母があつた。紳士之に答へて云ふには「職業は何にても可なり、乞ふ失禮を恕せよ、マツチを販賣するに於ても之を擴張せば其利益大なるべし」と、徒らに職業の是非を語る勿れ將又功名富貴を致す能はざるの原因を以て決して職業の責に歸する勿れ、要は自ら任ずると否とに因つて岐るゝに他ないので

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ
ある。

六月十一日

成功とは精神の別名なり。
精神一到何事か成らざらんと云ふ、然り精神を擧げて熱中する時は必ず成る、唯自然の道理に外づれざるを要するのみである。神に多謝す、人は斯の如き精神を具して此社會に生れ来たことを、其の素性に於ては貴賤の別あるべし、其の財産に於ては貧富の差あるであらう。然れども、此の精神を有するに至つては同一にして、加之も此の精神の作用に依つて成功の門扉は開かる、非ずや。



六月十二日

希望は勢力なり。
英國の一寺院バツトル、アツペイに一古兜を藏して居る。其の古兜に銘がある、曰く「希望は勢力なり」と功名富貴の希望豊夫れ功名富貴を致すの勢力に非ざらんや。青年諸士よ、直往邁進、左右を顧る處なく、一意専心、功名富貴の標的に向つて疾驅すべきである。

(英國古諺)

六月十三日

人にして信なくんば、其可なるを知らず。(孔子)
一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

唐の呂元膺は、或る所の知事をして居る時、歳末に囚人を調べる時、其の中の一人、明日は元旦なるに、父母に見ゆる事を得ずとて、悲しむ者があつた、元膺は其の情を憐れみ、悉く囚を放ち、期日を定めて歸り來れと命じた、獄吏之を怪んで、賊は放つべからず、一度放たば歸り來る事は思ひもよらぬ事と止めたが、元膺は、否々我れ信を以て人を待つ、人豈我に違はんやと云つて、悉く囚人を放つたが、囚人等も其信に感じて、期日に至つて皆歸つて來たと云ふ。

六月十四日

時と潮とは人を待たず。

(大和訓話)



米國の大領統ワシントン、秘書官に約して何時に會すべきを以てす、時到つて秘書官來らず、待つこと十分にして來る、ワシントン云ふ。

「卿、何が故に時間を守らざりしぞ」
秘書官答へて、

「時間を守らざるにならず、我が時計が狂ひ居りしなり」
ワシントン曰く、

「卿、速に其時計を改めよ、然らずんば我は秘書官を改むべし」と時間を厳守する斯くの如くなるべし。
澤庵和尚云ふ。

あさましや思へば日々の別れかな
一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

きのふの今日に又も遇はねば。

六月十五日

心身の獨立を全うし自ら其の身を尊重して、人たるの品位を辱めざるもの、之を獨立自尊と云ふ。(福澤諭吉)

人の社會に出るに當りて第一の要件とすべきは自主獨立を保つにあるを忘るゝ勿れ、自主獨立とは自家の身上に付一切他人に厄介を掛ることなくして自營自活の道を立ることを云ふのである、勿論社會は相持ちのことであるから艱難に當つて他人の扶助を受くることは強ち悪しき譯に非ざるも、苟も健全の體軀を有し、自由に労働を爲し得るものは如何なる困難に際會する



も他人の扶助に憑ゝ自家の生活を保つが如き無氣力千萬の事なきを要するのである。之は少しく頑固の説であるやうである。けれども、此精神は頗る貴重のものにして、一身に此精神を有するときは一身の獨立となり、一家に此精神を有するときは一家の獨立となり、一國に此精神を有するときは一國の獨立となるのである。

六月十六日

苦痛の後の快樂は甘美なり。(ドライゲン)

成功の賜は迫害と艱難との裡に奮闘して得らるゝのである。パンの爲に自ら健闘して、身に瘡痕を負はざる男子は、前提の一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

言を解せざるの人にして、共に成功を語るに足らぬ人である。成功の爲めに健闘した者は物質的報酬を以て主要なる目的とせず、迫害嘲笑失敗等を経て来る唯一個の成功の爲めに、絶大な又無限の満足を覺ゆるものである。彼の「サイラス、ダブルユ一、フィールド」が海底電線を發明し「トーマス、エヂソン」が電光を應用するに當りては、彼等の指頭に數千里程の電線があつた。彼等の腦裡に煌々たる光焰が燃えたのである。

六月十七日

美人は死するもその名聲は死せず。 (英國俚諺)
蒲生飛彈守氏郷の家臣に、西村左馬之助とて強力なる相撲の



上手者があつた、去る頃仔細あつて、勘當せられしが、許されずて歸參の後、氏郷は西村の強力なるを知りながら、試みるとや思はれたか、呼びに遣はして、座中にて相撲を取らうと云ひ出した、西村は相撲に勝たらば御心にや反かん、さればとて又負たればとて、輕薄者として見限られん、怒られても見限らる、には優れりと思案して、終に勝つた、氏郷は、無念なり今一番とて、又取込むを、近習の者等あはれ今回は西村負けよかし、左なくば手討にも逢はんと、各々手に汗を握つて見物して居る西村は又心の中に、たとへ手討になるとも是非がない、此度負けたならばいよく見限らるゝならんと、又勝ちたれば、氏郷は笑みを含みて、西村が真心を感じ加増して深く寵愛せりと。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

六月十八日

艱難は最善の良師なり。

(古 諺)

人間社會の仕事は、何時も順風に帆を揚げて居るやうなもの
は一つもない。時には風も暮れば浪も荒れる、それへ出會した
ものは不運とあきらめて、覆へされぬやう、沈没されぬやうに
風波と戦つて行くより外はない。若し此の時に弱つてしまへば
忽ち轉覆してしまふのである。艱難は人を玉にすと云ふ格言に
して過まちなければ、我々事業に従事するものは、この大
波瀾と戦ふことは、却つて將來の幸福を招く良師、即ち基と
なるものである。然り 此の大難關に向つて、有らん限りの力



を振はねばならぬ。

六月十九日

見聞覺知は外賊なり、情慾意識は内賊なり、只能く主人公
惶々不味にして、獨り中堂に坐する時は、即ち賊化して家
人となる。

(王陽明)

凡そ世の中の事は、良心と良心を叩き潰さうとする獸性との
戦ひである。キッドと云ふ人は、博愛と利己との争ひが社會の
進化であると云ふたが、意味は同一である。

戦ひでは強いものが必ず勝つ、良心が強ければ良心が勝ち、
獸性が強ければ獸性が勝つ、人には皆良心もあるが又獸性もあ

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

る。或る意味から謂へば人は皆半獸である、されば良心に勝たうとする獸性も強ち捨つべきものではない。之を良心によつて善導しさへすれば、仕事をするのは此の獸性である。王陽明の言は、獸性も之を良心によつて善導すれば大きな仕事をするやうになるものであると謂はれた他ならぬのである。

六月二十日

水泉深ければ則ち魚龍之に歸し、樹木盛なれば則ち飛鳥之れに歸し、庶草茂れば則ち禽獸之に歸し、人主賢なれば則ち豪傑之に歸す。
(呂氏春秋)
豊太閤、未だ羽柴筑前守なりし時、家中の侍、暇を願へば暇



乞を致さん、明朝館に參れとて自身茶を立て、饗應し、腰のものをなぞを興へ。

「何方へ行かれ候とも思はしくなくば、またく歸り來り給へ何日にも抱へ進すべし」

と懇に云ひて暇を取らせらるゝに、暇を乞ひしものは涙を流して或は思ひ止り、或は終生恩を忘れざりしとある。人を使ふものに此の寛量あつて初めて大なる事業を爲し遂ぐる事が出来る。

六月二十一日

最良なる謀は、斷乎たる決心にあり。(ナポレオン)
一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

「エドワード、エガレット」曰く「真に偉大な大精神は、一瞬の感應に因つて、彼が全生涯中に遭遇するよりも、偉大なる物を得ることがある」と「カリレオ」が望遠鏡を天の一方に向けて、コーベルニクスの金星の盈虚を確かめた一瞬時の感は、抑もどうであつたらう「コロンブス」が一千四百九十二年十月十二日の曉天「サンサルバドール」の海上の感は抑もどうであつたらう。

「かの園中に直立する樹木の影を見よ。雨に打たれ、風に吹かれ、花は飛び葉は落つ、而も克く嚴上に巍然として。日光の恩恵に浴す、其間果して如何なる争ひをやしつらん。人生遭逢の運命亦此の如きものならずや」と嘆じたのは、洵に理である。



凡そ十分に望を囑した事が失敗に終るのは、強固な意志がなく、疑心を以て事に當るからである。意志の弱き人は、運命のまにまに漂つて行く、かゝる人が成功を願ふは、己を知らぬ愚であつて、失敗は當然の結果である。斷乎たる決心は最良の策にして失敗に遠ざかる唯一の手段なり。

六月二十二日

人、他人の既に成し得たる事は必ず成し得べし。

(ヤレゲ)

人あり「ナザン、ロスチャイルド」に向つて其富豪を致した一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

る心得を問ひたるものあり。ロスチャイルド之に答へけるは、
「余の成功は唯一事一物總て他人の爲し能ふものは必らず之を
爲し遂ぐるを得べしとの自身の格言を守れるに由れり」と。嗚
呼、他人の爲し能ふ一事一物を必ず爲し遂ぐるべしとの自信こ
そ豈至強至剛のものに非ずや。

六月二十三日

轉がる石に苦付かず。

(古諺)

人は少くとも十年以上同一の事に、倦まず飽かず一意専心孜
々として勵精するときは、茲に始めて成績のや、見るべきもの
あらむ。屢々方面を轉するものは終に成績なし、轉がる石は苦



を生せず。

働くこそは確に人の運命、暑かれ、寒かれ、その日々の仕
事を勤めるより外に生きる道はない。偶の休みも稼ぎを補ふ爲
めなれば、休みに代りて一層勵みて成績の完美を期すべきであ
る。

六月二十四日

貧困は疾病の一種なり。

(ベルツクス)

貧は之れを驅逐せざるべからず、個人としての貧は則ち之を
驅逐することを要するのである。されば如何にせば貧は驅逐す
るを得べき乎、之れ言ふは易けれども、其行ふに難きは實に想
一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

像の外である。然れども人は困難なる事を仕遂ぐる程、愉快を感ずる特性がある。吾人は如何に實行の難き事柄にあつても遂行せざるべからず、實行の不能は、吾人事業の斷念ともなり、困難の二字は未だ之れを排するの餘地あればなり。

投薬宜ろしを得れば疾病を滅せしむるを得るは必然である。

六月二十五日

笑は自ら助くる者を助く。

(スマイルス)

時代の成功者が、如何に自助的精神に富みたるかは、常人想像の外にあるのである。然り、人の世に在る自ら助くるの心を欠かんか、此の如きは到底望みを囑するに足らぬものである。



自ら助くるの心なきものは、深窓の美人が、侍女下婢に助けられて、郊外に出るのと同じで、其の嫻々窈々たる有様は之れを優雅と云ふよりは、骨の無い——護謨製の人形の如き——玩弄に近いと云ふべきである。

自助力なきものは、骨抜鱈の如く、瓢箪鎗に似たものである。生理的には完備したる身體はあるけれども、處世的には申分なき不具者である。斯る者は社會の寄生蟲にして、何等の能力もないのである。自助的精神は人生の第一意義にして、之れなき者は自他の運命の前に全然盲目である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

六月二十六日

財寶も地位も愛に比すれば塵芥の如し。

(グラドストーン)

昔物語に、或早年に二粒の雨滴が天上にて、ナント今農夫が天を仰いで居るが、如何にして慰めてやらうかと相談をして居た、一滴の雨滴が云ふには、我等だけでは、此の早年に彼等を救ふことは出来ぬとしても、せめては慰めともならうかと、一滴農夫の額に落ちた。所が、一粒の雨に誘はれて遂に大雨となつたと云ふ。

エス、カレー曰く、汝若し人を救ふ事能はずとも、せめては



同情の涙を以て悲しむ者と共に泣け、人に金子を與ふる事能はずば、勢力を以て之を助けよ、大人を教ふる能はずば、小兒の師たる事を期せよ、國家の首柱と爲る能はずば、一家の支柱となれ、大衆に向つて教を説く能はずば、二三人集まれる所に立つて語れ。之れ慈愛は人類間至大の寶冠なればなり。

六月二十七日

主聖に臣賢なれば天下盛なり、君明に臣直なれば國の福なり。

(史記)

大閣秀吉の治世に、江州の代官某と云へる者、過分の負債を生じ、年々の算用が滞つた爲めに、既に罪科に處せらるべきで

一日一訓を守れ